

1月1日

### 「今年の標語聖句」

エゼキエル 18:32

武安 宏樹 牧師

世の人々は神以外の偶像、実質は自分を拠り所に生きる人がほとんどです。自分のため生きることに絶望する人は、心開かれて神の栄光のために生きる、正反対のベクトルを受け入れやすくなっています。「立ち返って/悔い改めて」原語シューブは本章 18~32 節に9回も登場し、聖書全体でも重要な概念です。内訳は「立ち返って」6回、「離れ」2回、「身を翻せ」1回。14章6節は一節で、同語が「立ち返れ」「身を翻せ」「遠ざけよ」と訳出しますが、これを後から順に、一つ目に罪&悪習慣から遠ざかること。とはいえ自分の努力で一線引くのは至難の業のため、自分の弱さを神がご存知であり、御子の贖いに感謝しつつ、自分のありのままを認め遠ざかるように、聖霊が働かれるよう祈ることです。二つ目に自分の努力でどうかしようとするところから、向きを変えることで、自分の収縮した思いから解放され、憐れみに富む神に相談を申し込むことで、自分で変える力より神の牽引力に委ねることです。三つ目に他の誰でもなく、一線引いた上で神のため生きるよう、パートナーシップを深めることです。以上「回心」も「改心」も神の選びと聖霊の促しにより、変革がなされるのです。

「生きよ」旧約には救いの明確な概念が無い代わりに、霊的な生死の概念が用いられています。本書で最も有名な37章は枯れ骨に神の息が吹きつけられ、音がして骨がつながり筋と肉と皮膚がついて、息が入り大集団となる幻です。新約的な「救われていますか？」よりも、「あなたは生きていますか？」の方が、伝道の話術に適するかも知れません。世の人は肉体はつながっているようで、何かつながっていないと感じ、自分を鼓舞し奮い立たせるものを求めますが、人の心の内奥に蠢くのは「空」(伝 1:)であり、罪への欲求と漠然とした不安が、断続的に人を苦しめます。この空しさを満たすのは主ご自身と御言葉ですが、人は生まれつき神と逆方向を向いているため、自分本位に神を求めるのでは、願ったような救いに出会えません。だから悔い改めが必要ですが入信時には、深さに個人差があり、いずれにしても以後の信仰生活の歩みで碎かれながら、「最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内に在(あ)りて生くるなり」と知ります。放蕩息子の父は帰還を信じて喜び迎えました。皆さんも聖霊を宿す神の家で、各人を通して謙虚に悔い改める者の姿、聖霊で喜び生きる者の姿を証します。

1月8日

## 「愛されています」

雅歌 1:1-4

武安 宏樹 牧師

語るに難しい書ですが、聖書正典に収められた事実を覚えたいと思います。詩歌書を一言で表せば、ヨブ記は神の絶対主権、詩篇は礼拝、箴言は知恵、伝道者の書は空しさ、そして本書は愛の親密感となります(リビングライ引用)。解釈法を大別すれば、比喩的に神とその民、字義的に男女の性を含んだ情愛、他に演劇的な見方もありますが、男女の彼方にある神との関係から捉えます。1節「ソロモンの雅歌」が表題ですが、晩年に霊的に墮落する以前の著作です。2節「どうか、あなたの口の口づけをもって、わたしに口づけしてください。」(口語訳)が原文に近く、頬にキスなどでなく唇同志合わさる関係を求めます。名詞「口づけ」が複数形なのは、回の多さか「おとめたち」人数故と思われます。本書は神との一対一の関係に見えて、一対複数の教会論にも通じています。パウロは教会を夫婦関係に喩えて、神秘的な一体性を語ります(Ⅰコ 5:21-33)。聖霊の賜物が複数人に与えられても、神に注がれる愛は目減りすることなく、多くの者に囲まれながらも、あふれるばかり求めて独り占め出来るのです。「愛」(2節)も複数形ですが、他の箇所も総じて性的意味を含みません(箴7:18)。

幾度もの口づけ、おとめたちへの愛、放たれる芳しい香油は複数形ですが、3節「あなたの名は、注がれた香油のよう」はいずれも単数形で、唯一の主と、その御名の威力を歌います。私たちが愛する人の何かでなく、名を呼びます。羊飼いである主は各人の名を呼び、私もまた祈りにおいて主の名を呼びます。人間なら一人に関われば他は放置ですが、神ならばそうならず奪い合いにもなりません。ゆえに4節「私を引き寄せてください」他でもなく私へ愛を求め、なおかつ「私たちは〜」おとめ集団で追います。「引き寄せて」は女性を恋人に引き寄せる愛の力の意(Ⅰレ 31:3)。彼の引き寄せる力ゆえに彼女らは追います。主の御名に魅力があって、心を潤すのに留まらず肉体を湿らす力があります。「奥の間」は複数形で各人に用意されますが、プライベートな空間、寝室です。他の誰も立ち入れず彼しか立ち入れない、鍵をかけた夫婦だけの空間です。既婚者は夫婦愛から、未婚者は神との交わりから想像して頂ければ幸いです。口づけと肉体とを交わし合う甘美な「奥の間」を、神との間で持っていますか。「エロチック」(ティンデル註解)でも、淫靡に非ず純粹で優雅な聖なる愛なのです。

1月15日

## 「愛に病んでいます」

雅歌 2:3-7

武安 宏樹 牧師

「りんごの木」の立ち位置を思う時に、エデンにて禁断の知識の実ではなく（歌「林檎殺人事件」や宗教画など）、いのちの木の方を覚えますが、知識の実をアダムとエバが食べたことで、局部を隠す恥意識と神から身を隠す罪意識が、言い換えれば以前は男女の交わりも、神と人の交わりもオープンだったのに、溝が出来てしまいました。以前は男女の間に常に神を見上げ、神のいのちを共有しつつ、神の愛と戒めと支えでバランスを保っていたのが壊れてしまい、愛の争奪戦と化し、恐らく夫婦不和から長男の次男殺害の悲惨な実が生まれ、以降の世界の混乱は今日に至るまで続いています。けれども彼女は争奪戦で目減りする愛では嫌だと、口に甘いのは神に背いて奪った知識の実ではなく、「あなたのみことばは、蜜よりも私の口に甘いのです」（詩 119:103）従順を通しその奥に在るいのちの木の實を求めています。されど御言葉に対する従順は、アダムの子孫である私たちには難しく、死に至るまで父への従順を貫かれた、御子の十字架を知ることが知識の実です（Ⅱコリ 2:14）。彼女は心と体を開いて、大きな木陰で安んずることを切望しました。この信頼感こそ女性の喜びです。

「りんご」に加え「干しぶどう」も、女性の局部の形で豊饒の儀式に使われた、エロチックな果物です。夫婦関係において昼も夜も交わる時間が不足すると、女性は男性と違って愛に敏感なので、元気をなくしたり苛立ったり責めたりします。男性も大変ですが、どっしり受け止めて配慮しなければなりません。「カづけ」「元気づけて」両語とも、下支えでリラックスさせる意味があります。彼女は愛に病んでいますと公言しつつ、具体的に言葉と愛撫を求めています。日本人男性とりわけ長男は、心の欠乏を言葉に出して甘えるのが下手ですが、夫婦関係は同性の師弟関係や友人関係と異なり、特別な愛の契約関係であり、パウロが結婚を薦めるのも、男女が愛し合う拡がりを求めているのでしょう。私たちはどこまでも愛に病んでいます。主イエスだけが父の愛を受けきって、その愛を余すところなく捧げきって満たされています。愛の不足を覚えつつ、恰も満たされているかのように演じるのは、過去に受けた心の深い傷です。神の左右の手で抱きしめられ、全身に受けた罪と傷のために主が死んだこと、その十字架のいやしに、私たちも愛に病みつつ満たされる回路があるのです。

1月22日

## 「さあ立って、出ておいで」

雅歌 2:10-13

武安 宏樹 牧師

「私は愛に病んでいます」(5節共同訳)彼女が公言したことに彼が応答して「わが愛する者、私の美しいひとよ。さあ立って、出ておいで」と声をかけます。パレスチナの冬は雨季ですが、罪を犯したり周囲と比べてうずくまっている、私たちにも温かい言葉と視線です。原文では「立って」「出ておいで」の直後に、「あなた自身で~by yourself」が隠され、彼女から応答が求められています。寝床から起きたくない人を急かすのに有効なのは、布団を剥がすことですが、休日の家族サービスをはじめ、私たちは本人の意志で能動的に動くのではなく、受身で結果的に動かされていることが多く、人為的なアメとムチでなくても、夫婦関係の理由に夫が収入を入れてくれる、妻が家事&育児をしてくれる等、相手が自分の役に立つことで、丸く収まっていることがあるのではないか。しかし誰かの期待や何か目的に動かされ、盲目的に達成しようとする人生は、行きつくところ矛盾と限界に失望。だから自分を信じて生きようとするのが、世の人々ですが、本当は自分の頼りなさを知りつつ、一抹の不安に目を背け、頑張ること自体が無謀です。かくて宗教は弱い者の居場所と笑われがちです。

いずれにしても人間の成長に、親子愛&夫婦愛&師弟愛&友情愛をはじめ、愛情が必要です。愛の量と質が良いほど、人間は真っ当に生きることができ、とはいえ人の愛は不完全ゆえ、期待に応えないと愛を失う恐れが歪んだ形で、失わないための行動によるアピールに駆り立てるので、不純な愛が衝突して、ここに的外れな人生の悲慘があります。潜在的には人は完全な愛を求めます。こんなにも私は愛され必要とされていたと、心ときめいて奮い立たせる愛を。「愛する方の声がする」(8節)それは条件付きやその場しのぎの愛と違って、遠くから恋人がパートナーとして呼び、幾多の山や谷を彼の方から近づいて、心の底から感謝できる愛です。神の愛の足音を聖霊の鼓動で聴いていますか。その足は心の扉を無神経に開けたり土足で踏み込まず、言葉以前に見つめて、喜びと苦しみを共有し合う慈愛に満ちています。時間をかけた見つめ合いが、夫婦に親子に友情に必要で、これを経て「立って」「出ておいで」が響きます。強引に引っ張るのではなく、あなた自身で能力で今や立ち上がれるからと促す。御名を信じた者が自立し(ヨハ 5:8/使 3:6)、美しい春と主への賛美が開けます。

1月29日

## 「みことばに親しみ、みことばを伝えよう」

Ⅱ テモテ 3:14-4:2

渡邊 賢治 師

遠い昔、テモテに向けて書かれた手紙は今なお、私たちに向けて語られている手紙でもあります。

今はどんな時代？ どう歩むか？（3章から）

コロナ、ウクライナの戦争など今は困難な時代です。そしてまた罪に汚れた時代でもあります（Ⅱ テモテ 3:2-5）。だからこそ、学んで確信したところにとどまっていなさい（v. 14）とパウロは勧めています。

### 1. 聖書（みことば）に親しむ「幼い頃から聖書に親しんで来た」（v. 15）

#### （1）聖書を読み、学ぶ（v. 15）

聖書に親しむことの大切さを教えています。例えば「みことばの光」（聖書通読）で毎日読み、祈る生活に祝福はあります。

#### （2）聖書のことばの力（v. 15-17）

##### ① 信仰による救い（v. 15）

聖書は罪を示し、悔い改め、方向転換に導く力があります。「キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」

例：足に障害をもつ荒川さんが「最も大切な話」によって救われ喜びと感謝の人生に変えられました。

##### ② 信仰の成長（v. 16-17）

聖書によって救われることは神の子とされる、すなわち神に似た者に変えられます。聖書は「教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」と書かれています。毎日、聖書を読む時、聖霊は私たちの足りないところを教えて下さいます。聖書は神の聖霊によって書かれているからこそ、祈って読む時、力を受けることが出来ます。

### 2. みことばを伝える「みことばを宣べ伝えなさい」（4:1-2）

みことばを伝えることは「神の御前で、キリスト・イエスの御前で厳かに命じます」と言われている様に神からの厳粛な命令です。

そして伝える時は「時が良くても悪くても」しっかりやりなさいと奨励しています。

例：コロナ禍に脳梗塞で倒れた同級生の河合君が「こんな人生があるとは」（渡邊師の救いのあかし）を読み教会へ。救われました。

みことばを伝えることは永遠のいのちへの道です。

2月5日

## 「愛がそうしたいと思うとき」

雅歌 3:5

武安 宏樹 牧師

恋い慕う彼女にライバルたちが茶々を入れてくることで、心中平穏でない、愛のせめぎ合いがあったようです。私たちは恋愛にしても信仰生活にしても、表向きは自分から求めているように見えて、実は世の流れや親の苦言などの、外圧に反応して一喜一憂したり罪悪感を覚えたりして、心身疲弊しています。善意でかける言葉も、受け手の痛みや信仰の成熟度次第で、心を閉ざします。人の心は完全に理解できず、神のみ究めうるゆえに祈りと謙虚さが必要です。けれども愛の動機については、キリスト者は「助け主」(ヨハ 14:16)が介在して、私たちの心の深みから聖い愛を放たれるゆえに、恐れる必要がありません。夫婦愛も親子愛も友情愛も、自分を通して神の愛が覆うように願うことです。助け主の愛はキリストの贖いの御業ゆえに、私たちの意志と決断とを通して、共に働かれ、日々の悔い改めと赦しの確信に立つ時にいつも体験できます。神は彼女のように不器用ながら心を開いて、その道を求める信仰者の愛を、見過ごしにされず、その方向が間違ったり歪んでいたなら修正くださいます。時に愛は誤解されたり失敗もしますが、かえって助け主の力学に出会えます。

助け主がいかに働かれるか。「そうしたいと思う」は「営み」(伝 3:1)と同語。愛の業が実を結ぶのに神の時があります。「生・死」「植え・抜く」「殺す・癒やす」「崩す・建てる」「泣く・笑う」「嘆く・踊る」「捨て・集める」「抱く・ほどく」「求める・失う」「保つ・放つ」「裂く・縫う」「黙す・語る」「愛す・憎む」「戦う・和ぐ」以上の、対義語の中で何れかめでたい一方を人は望みますが、避けて通りたい他方が、多く起こります。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝 3:11)人間の目は全てを見極めるのは不可能ですが、神は私たちの知らない所にて、そして死んだ後の将来の時代に実を結びます。その信仰で愛は純化されます。パウロも「失望せずに善を行いましょう。時が来て刈り取ることに」(ガラ 6:9)と語ります。御霊は為すべきことを「そうしたいと思う」衝動から示されます。先日の祈祷会では「苦しみ」が狭い所&束縛の意味から、主を呼び求める時に、肉体&精神&霊的ストレスから解放され、「広やかな地」へと導かれることを、学ばされました(詩 118:5)。「揺り起こしたり、かき立てられたり」されつつも、信仰の土壌は広くされ、各人と教会全体に愛と喜びの力が与えられるのです。

2月12日

## 「愛に酔え」

雅歌 4:16-5:1

武安 宏樹 牧師

本書第三部の結び、ちょうど中心にあたります。「閉じられた庭」(12節)が、「私の愛する方が庭に入って、その最上の実を食べる」彼女の準備が出来た。遂にゴールイン&ベッドイン。性的な表現で心身の結合で愛し合う二人です。宴は最高潮に達して列席者は「愛に酔え！」と喝采を送る、最高の瞬間ですが、繰り返しますが結婚式は本書の最後でなく、中間地点であることが重要です。次節から早くもすれ違う。男女の結合はゴールに非ずスタート地点に過ぎず、愛の営みに二人が酔いしれながらも、向き合いつつ与え続けるのが夫婦です。男性は物事を事務的に考え、運転など出来ることをやれば任務完了と思うも、女性は感情を分かち合いたく、結論の無い話を分かち合って聞いてもらって、言葉と肌合いから夫の愛を感じます。男女の思考回路や生理的相違について、本を読んだり先輩夫婦から話を聞いて勉強すると、すれ違いが少なくて済み、多くの教会では牧師が結婚カウンセリングを行います。夫は妻に、妻は夫に、満足して、いや満足させているでしょうか。互いを尊重し違いを受け止めて、愛をもって本質的&建徳的な言葉を、ぶつかりつつ交わす必要があるのです。

「妻たちよ、教会がキリストに従うように、夫に従いなさい。夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、妻を愛しなさい。」パウロは夫婦関係をキリストと教会の関係に喩え、この夫婦愛には神の愛を表す原語アガパオーを用いています(Ⅰコリ 5:21-33)。聖霊の賜物としての愛が、信者夫婦が愛し合う原動力となる訳ですが、新約ギリシャ語が「愛」の性質を、四語に分けているのに対して、旧約ヘブル語は整然とは分けられてはおらず、神の聖愛も人の性愛も丸く収まる図です。キリストは信者同士の夫婦間しか、居られないのではなく、全能の方ゆえ信者&未信者夫婦にも主権を及ぼされ、夫がキリストの必要を覚え、妻が確信をもって祈り仕えるよう共に働かれます。それは信者夫婦の何倍も大変ですが、だからこそ夫婦愛～神の愛に酔いしれ、夫にとってかけがいのない妻になりましょう。神への奉仕と家族の接し方が違っていたり、知らずのうちに关系的に空間的に聖と俗を分けてしまつては、家族から敬遠されます。夫婦⇒親子⇒主従関係こそが優先順位です(Ⅰコリ 5:1)。「世界に不潔がある限り、我々は雅歌を必要とし、非常に必要とする」(E・ヤング)

2月19日

## 「愛する方はどこへ」

雅歌 6:1-3

武安 宏樹 牧師

前回は結婚式でしたが、なかなか愛の巢に帰ってこない夫へ不満と不安で、眠っているようで心は目覚めている長い夜、主人はどこへ行っているのか？私よりも仕事の方が大事なのかと待ち焦がれます。時間と心の共有を求める、妻を覚えて夜遅ければ朝や昼に交わったり、愛し合う努力をしたいものです。こんな遅い時間に…自分で鍵開ければと、玄関の内外でせめぎ合いを経て、ようやく戸を開けたら、夫は別の仕事を思い出したか背を向けて出て行った。若い妻は自分の愛の不足かと思い悩み、夜の帳へ出て行って仲間と捜します。夫には生業を立てる仕事も教会の奉仕も大事ですが、それを家に持ち込めば、妻に背を向けているも同然です。夫も妻も自分なりに愛そうと努めています。けれども残念ながらかみ合っていない。そんなすれ違いから大抵は妻が噴火、夫も応戦して喧嘩が起きます。喧嘩も相互理解の目的ならば時に有効ですが、自己主張ばかりだと消耗戦となります。対する夫は離れた所で妻を恋い慕う。このすれ違いについて、夫婦に限らず人間関係から神との関係まで拡げます。

最初の人アダムは夫婦共謀の上で、造り主で「親」である神に背を向けます。主から離れることで悪魔に道を開く。言うまでも無く全ての罪の根源であり、ここに神と人とのすれ違いが生まれ、家庭&社会形成も自分の良いようにと、世界は古今東西で愛と富の奪い合いと化しています。私たちも罪の血統ゆえ、神に向きを変えて悔い改める必要があります。その一方で「すれ違い=罪」と、片付けて良いのか。全能の神は人が園から出て行くのを何故止めなかったか。男女は結ばれるように造られたのに(創 2:24)、何故肉体も思考も異なるのか。国家間・宗教間・企業間で、キリスト教界の間でも争いが絶えないのは何故か。たしかに以上全ての原因として罪の問題があり、キリストの救いが必要です。けれども私たちは安直に罪と片づけ、自分の具体的課題に適用することから、逃げて思考停止していませんか。神がバラバラにされた以上(創 11:)、すれ違いにも意味があり、人は架け橋となるため召されているのではないか、何故ならイエス・キリストは破れ口に立たれるため、世に来られたからです。互いに受け入れ合い、他者を知ろうとするために課題とすればよいのです。「キリストと一つにされ、夫婦が一つである意味と方向を知る」(上沼(うえぬま)昌雄師)



2月26日

## 「美しく、麗しく」

雅歌 7:6-10

武安 宏樹 牧師

前回はすれ違いでしたが、夫婦で話し合えたのか、個別に悔い改めたのか、いずれにしても別居状態を解消できた様です。他の人間関係でも同様ですが、不和から仲直りには硬化した態度を改め、非を認め歩み寄る必要があります。どちらかが歩み寄れば、相手もそれ以上は許さない態度に固執しづらくなる。謝った者勝ちというわけではありませんが、長期戦は双方とも消耗しますし、人間関係とくに夫婦関係は契約ですから、神の愛と赦しを適用することです。主イエスは和解を(マ 5:24-25)、ヤコブは謙遜を(ヤコ 4:10)、命じています。とくに夫は妻に決断だけでなく、謙遜のリーダーシップを発揮することです。「未熟な夫婦は、自分の払う努力が二人の仲を保つと考えやすい。相手の愛を素直に受けたり、感謝したりする以上に、意外にも自分が相手愛するという事実の方に夢中になるものである。けれども今の彼は、彼女のことを受容し、素直に彼女のことを'高貴な人の娘'(1節)と表現できるのである。6~9節は、夫が妻のからだをほめた後で、さあこれからと宣言する部分。彼女の肉体は慰めに富む愛そのものである。」(片岡伸光師「新聖書講解」いのちのことば社)

6節「人を喜ばせる愛」は「もろもろの快樂(たのしみ)の中(うち)にありて」(文語)が直訳で、原文では2行目「なんと美しい!なんと麗しい!」が1行目より先に来ます。二人の下半身は結合し、「なつめ椰子」の背丈(7節)、「ぶどう」の乳房(8節)を、愛撫しながら、「口」(9節)は最良のぶどう酒の芳醇な味わいと重ね合います。互いに裸になって言葉と肉体で愛し合う、夫婦愛の高嶺がここに描かれます。性生活を婚前や自慰に代え、逆に笑ったり嫌ったり卑下してはいけません。宗教性を精神と靈性に限定して、肉体を切り離すのは創造主への冒瀆です。昼は唇を通して、妻だけでなく家族や同僚を建て上げる愛と謙遜の言葉を、夜は唇を重ねて、妻だけと愛し合う。昼は手をもって夫は外、妻は内で働き、夜は手をもって秘部を。文脈では男女の営みから絶頂を極める流れですが、この愛は肉体の結合から、キリストとの靈的結合を見上げます(1コリ 13:13)。「信仰」「希望」とも人⇒神に向けられますが、「愛」は神が先立って双方向です。「愛」は「信仰」「希望」の成立要件、神と人(縦)、人と人(横)をクロスしながら、「互いに愛し合いなさい」(ヨハ 13:34)へ、美しく麗しい「悦び」が体を貫きます。

3月5日

## 「封印のように」

雅歌 8:6-7

武安 宏樹 牧師

本書最終回。封印は裁判所提出の遺言書や、理事会提出の教師推薦書など、重要文書に押されます。聖書では「♪封印固き門破り、出で給えりああわが主」(新聖歌 127「墓の中に」)とあるように、主の墓の嚴重な封印を想起させつつ、物理的&人為的&法的に封じても、復活の力には抗し得ないことを語ります。だから福音書から見れば封印など無駄と思いますが、妻は夫の愛を封じ込め、内なる心と外なる腕に刻まれ抱かれて、彼の体の一部になりたいと願います。「愛」は冠詞が無いことから、彼女とか彼とか神とか特定せず何れも適用でき、「強さ」は海を干上がらせる東風(出 14:)、サムソン(士 14:)などに登場します。「死」「よみ」まさに「地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて」(マ 27:51-52)の如く地上と下界と天上界が覆される史実を覚えます。「ねたみ」も冠詞が無いので、人間のドロドロした感情だけでなく、第二戒「神のねたみ」にもつながります。人のねたみは不信仰の実&肉の業として退けられますが(コリ 13:4/ガラ 5:20)以上の罪深い動機で沸き上がる悪いねたみもあれば、正しい動機のねたみも。「その炎は火の炎」激しさと正しさで、罪を露にする神のねたみがあるのです。

8回に亘り本書を味わう中で、共通するのは愛の試練ではないでしょうか。彼が見えぬ不安、ライバルへの敵対心、自分の中の不満、結婚後のすれ違い。以上を乗り越え前章で最高の結合を味わうも、それでハッピーエンドでなく、もっと互いの愛を刻み込むことで、愛の勝利を証すべく立たされています。「津波によってもキリスト・イエスにある神の愛を押し流すことは出来ない。たしかに物は無くなったが、私たちに対する愛は無くなっている訳では無い」(気仙沼聖書バプテスト教会:峯岸浩師)真実な主は受洗者 10 名を与えました。先生の話の論点は苦勞ではなく、喜々として神の愛を語るところにあります。苦しむ時に自分がだれに愛されているか問われます。「封印のように」焼印を入れられることを願って、頭も心も手足も下半身も愛の絆で結ばれましょう。キリスト者には聖霊が押印済で、内から罪をきよめ愛の人へと変え続けます。加えて誘惑する罪や人や欲望や自己愛などを、ねたみの神が撃退くださって、彼女の願う封印が木っ端微塵になるほど、怒濤の愛が浮き彫りになるのです。試練から愛が分かります。「揺れ動く地に立ちてなお十字架は輝けり」(聖 397)

3月12日

## 「十字架を負って」

ヨハネ 19:16b-22

武安 宏樹 牧師

受難節(レント)に入り、十字架を背負う歩みに重ね合わせたいと思います。総督ピラトとユダヤ人たちとの間で、処刑に関して激しい応酬がありました。釈放すればカエサルに訴えるとの恫喝に、恐れたピラトが屈した形となって、「ピラトは、イエスを彼らに引き渡した」「彼らはイエスを引き取った」二重の表現で段落も分けることに著者の意図を感じます。被告人イエスの所有権は、ユダヤ人側からローマ人側に完全に移り、偉大な先達が命がけで求めてきた、時至って神が送られた救い主を、遂に呪いをかけて追放しました(マ 27:25)。それ以降の歴史が証明する通り、パレスチナは血で血を洗う争いが絶えずに、ユダヤ人は憎まれ、福音宣教は完全に異邦人にシフトし後塵(こうじん)を拝しています。よって主イエスはローマ人が引き受け、彼らが死刑を執行するに至りました。「神が罪に対してこのようなさばきをしたことに、震撼させられないならば、私たちは石よりも頑なな人間だろう。一方で、神が独り子を惜しまなかったほどに、私たちの救いに特別な関心を抱いていたことを証する時、神の恵みの何という豊かさ、何という優れた崇(あが)めるべき善意を見ることだろう」(加 9:7)

ユダヤ人の手から離れたイエスは、皮肉にも彼らの律法の要求を満たして、十字架にかけられました。頭上にヘブル語(ユダヤ人)、ラテン語(ローマ人)、ギリシャ語(他の人種)、つまり世界中の人々が読めるよう「ユダヤ人の王」と、掲示されました。これでは末代までの恥と、ユダヤ人は訂正を要求しますが、ピラトは先の弱気はどこへやら、書き方に固執し頑として変えませんでした。以上キリスト殺しを巡る駆け引きは、自己中心&無責任&保身&憎悪が絡み、自分の罪性を自覚せず、自分が光栄あるマリアとは反対に恥ずべき名として、世界中の教会で使徒信条にて唱えられるとは考えず、醜い争いに終始します。救われる余地の無い両者が救い様の無い争いを繰り広げる中で、神の計画は、皮肉にも完成を見ます。信仰者でなく不信仰者の行いも摂理に用いられます。「ピラトは見放された者でありサタンの手先だったにもかかわらず、ひそかな本能を通じて福音のラッパと立てられ、福音のごく簡潔な要約を3カ国語で公布したのである」(同) そんな罪人さえ福音に用いられる神に恐れ入ります。神の愛の「広さ・長さ・高さ・深さ」(1<sup>o</sup> 3:19)、恵みと摂理の中で生きましょう。

3月19日

## 「十字架の上で」

ヨハネ 19:23-30

武安 宏樹 牧師

主の受難の心情的部分については、本書は三福音書に任せて割愛しますが、ヨハネは律法の完成者として描きます。兵士たちの遊び感覚や四女性たちの今後の生活が困らないように隣人愛や、渇きにぶどう酒を求める場面など、「聖書が成就するため」と繰り返しつつ、最後の御言葉「事畢(ことおわ)りぬ」(文語)です。「この叫びは、戦に破れた犠牲者の最後の喘ぎではなく、勝利者の勝ち誇った声である」(テニ)東の間の喜びに非ず、地上に来られてから主の「人生」目的が、アダム以来の神の怒りを積み上げてきた、膨大な罪の債務を完済した叫びで、ゴールとしての十字架を見据えて、主は生涯をポジティブに完走しました。私たちは様々な心配をしつつ、「今日を生きる」「明日があるさ」で生きますが、十字架に人生の目的を定め、主とともに生きることこそ真理です(ヘブ 12:2)。

一つ目に主は十字架上で苦しみながらも、下に集まる人々を配慮しました。母の姉妹サロメは厳しくいさめられるも(マ 20:20)、謙虚に仕えてきました。マグダラのマリアは7つの悪霊を追い出された感謝を、決して忘れなかった。四女性とも形は違えど恵みを経験したことで、十字架から逃げませんでした。何万の群衆の喝采ではなく、数名の真の信仰者の姿に主の心は励まされます。

二つ目に「われ渇く」(文語)を兵士は喉の渇きと解釈も、真意はそれ以上に、霊の叫びでゴール目前に、父からの栄冠を渴望する求めです(詩 42:2/マ 5:6)。人々への心遣い以上に目は天に向かい、肉体裂かれ血が流れる痛みを通し、霊を剥き出しに父に渇きます。サムリアの女(4:14)群衆(6:35)仮庵祭(7:37)、以上で御自身から飲めと言われますが、満たされているから与えるのでなく、父とつながるから苦難の中でも泉のように、与えられることを証したのです。渇き、満たされ、また渇き、また満たされる。「渇く者は来なさい」(黙 22:17)

三つ目に「霊をお渡しになった」父が取ったのでなく、自ら引き渡しました。この語が前章からユダの裏切り⇒ユダヤ人からピラト⇒処刑のため兵士へ、主の所有権はコロコロと「引き渡されて」いく中で、人々の罪と病を負うこと、自分の生命を明け渡すこと、とりなしをすることは「彼」が主語です(イザ 53:)。苦難の生涯を喜んで受け止め、引き回されど歩みを止めず、律法を全うして、最後に大政奉還。天の家で父に抱かれるために、主は全てを捧げていました。

3月26日

## 「真実な証し」

ヨハネ 19:31-7

武安 宏樹 牧師

主の亡骸(なきがら)を取り降ろす場面で、ローマ人の習慣では死まで放置されますが、ユダヤ人は律法で翌朝まで放置を禁じられ、脚を折り死を早めようとするも、兵士は脚は折らず槍で突き刺し死亡診断。奇しくも旧約の成就となりました。古来から実は死んでおらず、仮死状態で葬られ墓から脱出との仮説もあれど、明らかに致命的な合併症が起きた結果と、医療学界からも証明されています。「血と水」が噴き出すリアルな描写は、ヨハネが上記の仮説を打ち破るため、「これを目撃した者が証ししている。その証しは真実であり、その人は自分が真実を話していることを知っている」(35節)に彼の本音が込められています。彼が強調したかったことは「血と水」が何を意味するか、神学的議論より前に、イエスは完全に死なれ、不死身ではなく人間と同じく寿命を全うしたことで、完全な死の結果として、血と水が噴き出した順序こそ、信仰の「死活問題」で、キリストが私たちの罪のためたった一度、死なれたことを忘れないことです。悪魔はキリストを死に至らせながら、死んでいないかの如く偽りを語ります。しかし米国人ジャーナリストは医師と対談を通し、主の死を検証しています。

「歴史家エウセビオスは『鞭打たれた者の血管がむき出しになり、筋肉、腱、内臓まで飛び出ている』と表現し、十字架にかかる前に鞭打ちで死んでしまう人もたくさんいました。死ななかつたとしても血液量減少性ショックに苦しんだことは確かで、心臓の活動が早まり、血圧が下がり、気を失います。重体を疑う余地はありません。釘が打たれる毎に最も太い正中神経が壊され、到底耐えられる痛みではありません。十字架の最終的な死因は窒息死です。心拍数は死を迎える前に異常に上がり、心機能不全を起こしていたと思われ、結果、心臓の周りの細胞膜周辺に心外膜液、肺には胸水という液体が集まり、槍を引き抜く時に双方と大量の血が体外に排出され、本書記述と一致します。イエスが死亡していたことは、絶対に間違いありません。」(リー・ストロベル)私たちは生きているのと同じだけ死んでいなければ間違いです。十字架の目撃者&体験者として、どんな些細な罪と弱さも、聖霊に示されて悔い改めを拒む頑固な心も十字架につけることです。本書で「血と水」の順序となるのは、「血」が救いの第一条件、その結果として水が奥底から流れ出るので(7:37)。

4月2日

### 「有力者の参列」

ヨハネ 19:38-42

武安 宏樹 牧師

主の葬りの場面で、他の福音書がヨセフについて「善良で正しい」(ルカ 23:50)「勇気を出して」「神の国を待ち望んでいた」(マコ 15:54)好意的な表現に対して、本書は「ユダヤ人を恐れて」(38節)「人からの栄誉を愛した」(12:42)辛口です。ニコデモも3章で誠実な質疑応答をしますが、信仰告白までは今一步至らず、パリサイ人に詰め寄られては二の句が継げず、不甲斐ない信仰者の印象です。とはいえ葬儀委員長として主催し、自分の新しい墓を提供し、香典も多額と、真実な心で「故人」を偲び最大限の礼儀と費用で送り出したことは、列席者も、慰められたでしょうし、彼らの存在は使徒時代の宣教に益となったでしょう。議会での十字架の決議に棄権か退席か、忸怩たる思いで傍観者となった身に、私たちも戦前の国家統制下に置かれた歴史を省み、立場を重ね合わせます。圧倒的に不利な状況で反対を表明し、イエスが主と告白するのは大変です。主に生前寄り添ったのが社会的地位の低い四女性で、死後寄り添ったのが、隠れキリシタンの二議員とは皮肉です。主が死なれた後で遅きに失しますが、彼らの悔い改めの現れとしての葬儀を、主は復活することで用いられました。

私たちの信仰を貫く上で、邪魔をしてくるのがこの世の価値観や肩書です。正しいことを正しいと、悪いことを悪いと、自分の意見を公にすることで、仕事や人間関係や名声を失うことがあり、偉い人ほどリスクが高くなります。「だれでもわたしについて来たいと思うなら…」(マタ 16:24)思いはあっても、自分を捨てられず十字架も負えない。罪悪感と歯痒さを感じていたでしょう。主はどう見ておられるのでしょうか。平民は愛して地位ある者は愛さないとか、そういうことは言われません。せめて葬儀と香典準備はと心中期するものが、あったことでしょう。そして彼らの砕かれた思いは空しく終わらず(詩 51:17)偶然という用語弊がありますが、墓が十字架から至近で運ぶのが容易であり、奇しくも最初の人アダムの墮罪と同じく、第二のアダムなる主の救いの場が、園であることも相まって、「次章の物語が明らかになるのに役立つ」(加ヴア)ものとされました。神は彼らの奉仕も用いられ、現在でも聖墳墓教会として、死と復活の地として求心力となっています。偉い人も偉い人なりに用いられ、恥を承知で奉仕した心が主に喜ばれ、復活ストーリーの立役者とされました。

4月9日

## 「復活」

I コリント 15:3-6

武安 宏樹 牧師

本書の著者パウロが「最も大切なこととして伝えた」のがキリストの復活、彼は復活の「語り部」です。キリスト者は牧師のように講壇で語るだけでなく、全信徒が福音を家族や友人に語ることも含めて、「キリスト者＝語り部」です。語り部といえど使命感はまちまちで、広島や長崎の被爆者や沖縄の集団自決、時の流れや政治圧力による風化に抗し、生命をかけて血と涙を流し語る方も。いずれにしても生涯かけて語りたいことの情熱がある人は、力を感じますし、それだけ勉強もしますし魅力的ですが、語り継ぐ困難も覚えることでしょう。戦争のセの字も知らない修学旅行生に揶揄され、愕然としたとの記事もあり、自分が老いていく中で若い世代に対する、世代間ギャップに絶望も感じます。

パウロが語り部として伝えようとするのは、彼自身受けたからとあります。ペテロらのように、直接的に自分の目で十字架を目にした訳ではありません。伝承として受けましたが、それだけでなく「啓示によって受けた」(ガラ1:12)つまり霊的体験として受けた。以前はパリサイ派として厳格な生活を志向し、キリスト者を異端視して徹底的に迫害する中で、天からの光が彼を倒します。そこで以前の彼は死んで3日後に新生する、十字架体験をします(ガラ2:20)。かつて律法の知識と誇りだけで生きながら、その通りに生きられぬ罪意識に、死&復活を聖霊体験したことで、汲めど尽きぬ泉のような力を獲得しました。信じる者は同様に決定的体験と現在進行形の体験で、力強く生き語るのです。

一方で「体験」というと胡散臭さも覚える人々も、世には多くいるでしょう。キリスト・モーセ・日蓮・空海・天照大神の、霊言集を刊行した教祖が先日死去。道場で空中浮遊に励む教えもありました。新興宗教の多くはいいとこどりで、結局は教祖や霊能者の権威が主体となり、死去後に血肉の争いが定番ですが、パウロは繰り返し「聖書の書いてあるとおりに」と、聖書の権威を強調します。自分の権威など些細なもので、キリストの権威で充分ではありませんけれども、それ以前に、天地創造～終末まで、折り返し地点でキリストが現れる史実を、証しするところの不朽の名著である神のことば、聖書の権威に訴えています。聖書の記述が体験を通して具現化するのが、私たちの信仰に他なりません。

4月16日

## 「見て信じる者」

ヨハネ 20:1-10

武安 宏樹 牧師

本章最後「イエスが神の子であることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るため」(31節)は本書の結論で、旧新約聖書全体の結論です。復活の客観的記述は他の三福音書の方に委ねて、本書では復活に対する人々の反応と信じ方に焦点を当てます。後から入った愛弟子おそらくヨハネが「見て、信じた」以降マリアや弟子たちも顕現で信じ、最後に理系人間で触らないと幽霊か判らぬとトマスが、告白に導かれますが、「見ずして信ずる者は幸福(さいわい)なり」(29節)は彼だけでなく、全信者に語られます。彼らは自分の目で確認しないことには、聖書の記述や聖霊の語りかけだけで、神を100%信じきれない者の典型で、この箇所「行く」「来る」を表す動詞が、11回も登場するのが象徴的で、墓に行ったり覗(のぞ)き込んだり自宅に帰ったりと、何とも落ち着きのない半信半疑の信仰者像です。見て信じるならば良い方で、見ても信じない、いや見えていない者も多くいます。私たちはどうでしょう。ペテロは自分の失敗を顧みて、救いを得た者は見ずとも信じる事が出来ると語ります(1ペテ 1:8-9)。救いを100%生活に適用し「信じ続ける」ことです。

礼拝中心&教会中心&御言葉中心こそ、主に喜ばれる信仰生活の土台です。一つでも欠けると、手抜き工事の建造物のように揺さぶられると崩壊します。以上完璧なら盤石との保証はありませんが、私たちの救いは己の熱心に非ず、上からの恵みをどれだけ受けるかなので、人間の側でも最善の努力をすれば、目に見えない神の道筋を知り、砕かれた心ならば御言葉が浸透し成長します。聖書知識や基本教理といった知的部分と、体&心&祈りによる証しと奉仕が、バランス良くなされ、創造の恵みとキリストの人格と聖霊の実を求めること。そのように成長すると目に見える事柄で、一喜一憂の振幅が小さくなります。それでは見えるもので信じようとする者は、神の前にあってはならないのか。そうではありません。彼らも目に見えるもので一喜一憂しながら学んできた。嵐を叱って静まる湖に、5つのパンと2匹の魚に、変貌山で聖人との会合に、絶えず「信仰はどうした？」と発破をかけられつつ、神の大きさを知るので。憐れみ深い主は不信仰な人々の右往左往さえも、無駄にせず用いられました。主の御業は奇蹟と意外性に満ち、目には見えずとも信じ方を教えてくれます。



4月23日

## 「あなたは本当のことを言いました」

ヨハネ 4:16-18

竹内 智之 師

今日のポイントは人は出会いによって変えられるということです。今日の箇所はイエス様はユダヤを去り、ガリラヤへ向かう途中の出来事です。ガリラヤへはサマリヤを通ることによって近道になります。しかし、ユダヤ人はサマリヤを混血の民族、偶像崇拜をしているという理由で忌み嫌っていました。イエス様はユダヤ人としてお生まれになったため、この背景については理解されていました。しかしこれらの風習を乗り越え、サマリヤを通られました。イエス様は炎天下のもと井戸の傍らで休んでおられた時、一人のサマリヤの女性が水を汲みに来ました。この女性はおそらく人に会うことが出来ない理由があり、この様な時間が来たに違いありません。しかし、その場にイエス様が座っておられました。イエス様はこの女性が来るのを待っていました。

イエス様は女性に「水を飲ませて下さい」と声をかけました。イエス様は「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。」と女性に言われました。人はのどに渇きを覚える時に水分を補給します。のどに渇きを覚えるように心にも渇きを覚えるということをイエス様は女性に伝えようとしていました。しかしサマリヤの女性は「主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください。」と物理的なものを求めています。私たちも目に見えるもので安心を得たいと思う弱さを持っています。サマリヤの女性は自分の心にイエス様が入ってきたことに気づいていませんでした。心に活ける水による潤いを得ることはイエス様と対話することです。私たちが祈る時、すでにイエス様との対話が始まっています。私たちは心を開くことを求められています。

イエス様の対話の中で嘘偽りがあればイエス様との対話は成り立ちません。サマリヤの女性はイエス様に心を開きました。その結果、イエス様から「あなたは本当のことを言いました。」と声をかけられました。イエス様は本当のことを言うことで幸せにして下さるお方です。

イエス様は「行ってあなたが幸せになれると思っているものを連れてきなさい。」と言っています。私たちの日常生活が問われている気がします。私たちもこのサマリヤの女性と同じ立ち位置にいることを忘れてはいけません。イエス様の前に包み隠さず告白することで赦しを得ることができます。そして、回復、祝福、本当の幸せを与えて下さいます。サマリヤの女性を変えたのはイエス様です。イエス様は苦しみを理解してイエス様の方から近づいて下さり、対話して下さいました。イエス様は苦しみから解放して下さい下さる力あるお方です。イエス様はすべてを知って下さるお方です。

4月30日

### 「あなたは本当のことを言いました」

ヨハネ 20 ; 11-18

武安 宏樹 牧師

本書は復活に対する人々の反応を記しますが、弟子たちの慌てように比べ、マグダラのマリアは「墓の外にただずんで泣いていた」。主は悪霊を追い出し、闇の人生を 180 度変えてくださった「恩人」ゆえ、死後も寄り添っていました。ある意味で弟子以上の忠誠心ですが、彼女も「まだ理解していなかった」(9 節) どうしたらよいか判らずに、悲しくて寂しくてやりきれなくて号泣していた。誰もが幼時に親とはぐれて迷子で泣いている経験をしますが、それと同じで、泣くと涙目で誰が目の前にいるか見えません。ところがちょうど良いことに、白い服を着た優しい係員に声かけられ、ホッとして我に返り言葉が出ますが、「なぜ泣いているの？」よく考えると変です。ここには2つの意味があります。一つは迷子ゆえ「ヨシヨシ」となだめ、もう一つは係員(御使い)が目丸くし、「なぜ泣く必要があるの？ 目で見ている方向が逆じゃない？」と諭したのです。神は彼女の間違った執着も、御使いを通して「回れ右をしてごらん！」と教え、私たちも同様に空しい過去への感情から、向きを変えるよう導かれるのです。

墓で泣くマリアといえば、蘇生したラザロの姉マリアを想起します(11:)。この時の主の反応はなだめどころか、「霊に憤りを覚え、心を騒がせて」と、人間のように感情や雰囲気呑み込まれない、聖なる憤りの涙を流しました。「信じるなら神の栄光を見る、と言ったではありませんか！」と一喝した後に、命じるとラザロは生き返った。これは来るべき主の復活のリハーサルでした。たとえ主がそこに居なくても、信者と共に生き永遠のいのちなる方であると、ただ信じる事が求められています。マグダラのマリアは後方を振り向けど、三人目の係員としか認識できず、されど今度は「だれを捜しているの？」と、優しく声をかけ、あの懐かしい羊飼いの「マリア！」の御声に改めて向き直り、この瞬間に彼女は「お父さん」と感動の再会。しかし想定外の返事が来ました。「わたしにすがりついてはいけません」しばし御体に触れる時間は良い。されど天への途上の主は彼女の手を離されます。でも再び迷子になりません。助け主なる聖霊が信者に内住するからです(14:)。マリアは信じて手を離し、その視線と手は天へ伸ばされ解き放たれた。「伝えなさい」全世界に出て行き、復活の主を伝える器となります。私たちキリスト者は泣く必要の無い民です。

5月7日

## 「平安と聖霊」

ヨハネ 20 ; 19-23

武安 宏樹 牧師

弟子たちは師を失った喪失感&脱力感にあふれ、集まる部屋に鍵をかけて、自分たちに死の手が伸ばされないよう籠城し、心身追いつめられていました。あたかも巨大な鉄球で建物が破壊される、あさま山荘事件の如き状況ですが、マリアから主の復活情報を聞くも、彼らは半信半疑で受け止められません。私たちもこのように打ち砕かれた、敗北経験を通して福音に出会い主を求め、モーセの如く祈りの手を挙げ、今まで頭で知れど改めて聖なる神の臨在から、己の小ささと罪深さを知り、献身表明したことがあるのではないのでしょうか。彼らは天に目を上げ祈ることも生きる気力すら無い、うつ状態と思われます。「すると、イエスが来て…」(19節)この接続詞は通常は順接に用いられます。うつであろうが罪深かろうが裏切者であろうが、嚴重な警備が施されようが、全てスルーして復活の主は来られた。それも真つ暗な彼らの真ん中にです。そして予定されて当然かのように「平安があなたがたに!」宣言されるのです。それも彼らまとめてでなく、うつうつとした各人の心の真ん中に立たれます。打ちのめされて傷ついて罪深いから、されど召命は不変ゆえ主は来たのです。

夢を見ているのか、いや、死者であるイエスの霊を見ているのだろうか、いいえ幽霊なんかではなく、物理的空間にも遮断されずに自由に行動できる、にもかかわらず彼らが触れることもできる「御霊のからだ」(Iコリ15:44)です。二度と会えないと心の底で封印した相手が、眼前に立たれるとうろたえます。こんな私に会いに来てくれた!そこに愛と赦し、罪悪感から解放があります。だからといって以前の関係に即座に戻れるほどの、心の整理はついていない。そこで再度「平安があなたがたに!」1回で足りないから2回言われたのです。1回目は彼らの癒しのため、2回目はさらに彼らの使命を付け加えることで、この部屋から全世界へ出て行きなさいと、「いのちの息」(創2:7)を吹き込み、生ける屍からの霊的再生を示しつつ、新しい人生の始まりを教えられました。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です」(15:5)究極的な聖霊の御働きは、神と人とを結ぶ絆です。最初の人アダムは不従順から自ら関係を断ちました。身勝手な人間の尻拭いをする必然性も無いのに、神は愛する御子を犠牲にし、和解の道を示しました。この罪の赦しの福音が人を再生し世を変えるのです。

5月14日

## 「信じる者になりなさい」

ヨハネ 20 ; 24-29

武安 宏樹 牧師

トマスの人物像については、「われらも往(ゆ)きて彼と共に死ぬべし」(11:16)「いかでその道を知らんや」(14:5)自分の無知を認めて、主の説明を引き出し、後になって主の死に様をなぞるような預言となるなど、重要視されています。理系人間で頑固との印象がありますが、彼が弟子の一角を占めていることが、単純なペテロや熱心なマリアなど、感覚的で素早い者ばかりが全てではなく、遅れた者を一匹の羊の如く追う主の愛の豊かさから、奥行きを感じさせます。

一つ目にトマスだけなぜ最初の顕現に居なかったのか、理由は不明ですが、恐らく他の弟子と居たくなかったのでしょう。教会の交わりから離れると、信仰が低下してサタンの誘惑に負けるので、決してほめられたものではない。けれども主は責めませんでした。異様な雰囲気巻き込まれるのを嫌がって、静かに復活を受け止めたかったのか。そんな周囲について行けない者をも、主は憐れまれ彼だけのために再訪、彼ならではの性格を主は尊重されました。

二つ目に彼のような性格の弟子を尊重するだけでなく、主は用いられます。「彼は信じていないのに信じていると絶対に言わず、妥協しないという誠実さがあつた。納得いくまで食い下がる人の中に究極的な信仰がある」(バークレー)「道」「真理」「いのち」を求めるからこそ、己の分別に頼る不信仰と誹られても、生身の主を求めた。彼は主の復活を信じる事が出来なかったのでしょうか。そうではなく、他が信じるから自分もと流されるのが嫌で僭越な要求をして、その方が失礼でないと考えた。だから主は見るだけでなく触れよとまで招き、されど彼には見ただけで充分でした。「なりなさい」は能動と受動間の中態で、信じる決断は本人ですが、神は私たちが信じ続けるよう助けてくださいます。

三つ目に彼は結果として「私の主、私の神よ」と最高の信仰告白をしました。疑い深く鈍臭く理屈っぽい、信仰者として恥ずかしいこんな私をも見捨てず、私を創造よりも前から選ばれ、私のような思考回路に寄り添ってくださる主、世界を手中に収め、壮大で歴史的なご計画の中で私を用いてくださる神です。外典には辞退と熟考の末に、疑いようの無い導きを確認してインド宣教へと、「あなたの望む所なら、どこへでもまいります」と服従する彼の姿があります。

5月21日

## 「信じていのちを得る」

ヨハネ 20 ; 30-31

武安 宏樹 牧師

次章は付加と言われるため、31 節は実質的に本書の結論部分となっており、序論の 1 章 1 ~ 5 節とセットにすると、ヨハネの伝えたいことが分かります。ここまで原語「いのち」が 51 回、「信じる」が 91 回と、後者が多く登場しますが、順番は「いのち」(1:4, 20:31)が「信じる」を包んで、人が信じようとする前に、永遠のいのちに導かれて信仰に至ります。この両者の関係を考察しましょう。

### ① 罪からの救い

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに…」3 章はニコデモと主イエスの問答です。彼は神を信じ律法の教えを忠実に行うため努力するも、救いの確信が得られず主イエスを訪問。真面目人間ゆえ力の抜き所を知らず、ガチガチで頓珍漢な返答をしましたが、他のパリサイ人に比べて謙虚でした。彼の名が記されているのは、遂に恵みの世界を悟って主を信じた故でしょう。「一人として滅びることなく…」の中に自分の名も含まれていることを知り、真面目さやプライドが砕かれ、永遠のいのちと出会い救いを体験するのです。

### ② 死の力からの解放

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」(11:25)ラザロは死んで葬られました。誰が生き返ると思ったか。親族たちは失意の底にいましたが、「出て来なさい」御言葉で彼は蘇生します。いのちの主であると信じる時に、死んでも生きるもう一つのいのちの存在を、証明しました。キリスト者の人生は死んでピリオドでなく、カンマに過ぎず、死の恐れから全く解放されているゆえに、永遠の計画の中のほんの一瞬です。永遠のいのちを信じると見方が 180 度変わり、自分を捧げる人生を始めます。

### ③ 聖霊の保証

「この方は真理の御霊です」(14:17) 罪からの救いも死の力からの解放も、永遠のいのちの実ですから、私たちは何も出来ず聖霊がどうしても必要です。恐れは偽りを生んで自分も隣人も縛りますが、聖霊は真実と自由を与えます。健康な人も傷ついた人も教会も、主のぶどうの木にとどまりなさいと言われ、その肢体としてつながりながら、私たちは信じていのちを得て成長します。

5月28日

## 「声を張り上げ」

使徒 2:14-21

武安 宏樹 牧師

過去のペテロは己の力を過信したり躓けば弱くなったり、浮き沈みがあり、「あなたを知らないなどとは…」と力を込めて言い張りましたが(マコ14:31)、以上を超えたところの全く別の内なる聖霊の力から、「声を張り上げ」ます。大声は腹から発する必要がありますが、腹(=心)は墮落によって歪められて、偽りや高慢の根拠ゆえ、彼も人間的な思いから常に不安に満ちていました。「しかし聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます」(1:8)強い逆接「しかし」は、罪により神のかたちを歪め続ける人生からの回復です。炎の舌は聖霊と直結しゴジラの如く火を噴く、人の努力に非ず恵みの力です。

一つ目にペテロは旧約ヨエル書を引用し、以前は王や士師や預言者などの、特別な神の人限定の聖霊の注ぎが、「終わりの日」全ての人と語ります。終わりの時代に偽預言者出現や民族&国家戦争や大震災や飢饉&疫病など、以上の起こる前に信者が迫害を受けると、主イエスは預言しました(ルカ21:)。今日の世界はその通りとなり、絶望感に溢れた人々が自傷&他傷を行います。日本も世界も加速度的に愛と平和が崩壊し、憎しみと病が押し寄せています。バベルの塔で世の力の結集を図るように、悪しき勢力が結託する暗い時代に、聖霊を注がれた私たちは戦いの使者として、炎の舌をもって福音を語りつつ、私たちはキリストによる人類復興の青写真を、教会の交わりを通し証します。

二つ目に「主の語名を呼び求める者はみな救われる」(21 節)呼び求める者の全てに聖霊は内住し、信じる者全てに聖霊は神の業を代行させようとします。戦後のわが国の教勢は直後のブーム以降は、伸び率は絶えず下降線を辿って、今世紀は信者数自体が低落傾向です。戦前の偶像礼拝の影響も一因ですが、真剣に悔い改めつつ、本格的な戦いも収穫もこれから本番と期待しましょう。世の中が不景気で絶望的なら、闇の中で私たちはまばゆいばかり発光します。「救いの門は全ての者に開放されており、私たちの不信仰以外には、入るのを妨げるものは何一つないのだ」(加ガァ)聖霊は救いの門と祈りの門を開いて、隣人と地域社会を照らします。教会成長論や力の伝道など目に見える指標で、妨げられたリバイバルは、聖霊&信者&教会の一体から質的に実現されます。

6月4日

### 「舟の右側に」

ヨハネ 21:1-8

武安 宏樹 牧師

「エルサレムでの最後の1週間は彼らの生涯の中でも試練と混乱に満ちた時期であった。数日間に、その未熟な霊的状态で消化しきれないような教えを受けたのであった」(テニ) 弟子たちには癒しの時間がどうしても必要でした。私たちも同様に、打ち倒されるような試練の後に御手の介入を体験すると、即座に受け止めることが出来ず、自分のこととして整理に時間がかかります。ただ山籠もりするだけでなく、日常生活に戻されながら心身が馴染んでいく。すぐに恵みを受け止めることが出来ないのは、私たちの不信仰の問題でなく、全能の神の御業を小さな人間がすぐに理解するのは、最初から無理なのです。ペテロらが漁に出ることは、過去の恵みや弟子の身分と訣別するのではなく、彼ら自身の立て直しを図るために、都を離れて地元で家族の元に帰りながら、同郷の弟子たちと行動を共にしているので、理に適った選択だと言えます。召された原点のガリラヤ湖に帰って、召された原点の漁師職に戻ることにさえ、「神の賜物と召命は、取り消されることがないからです」(マ11:29) あるいは結果的に神の御手の中で全てを益としてくださったゆえに、最善なのでした。

彼らが以前そうしていたように漁に出たのは、心身のリハビリ目的でした。漁をしながら復活に思いを馳せる心境にもなれず、茫然と網を下ろしていた。そこへ「子たちよ、何か食べるものがあるか」(口語訳)と岸辺から声がします。未だ主の御声だと結びつかず、それでも心惹かれる声に素直に耳を傾けます。「舟の右側に網を打ちなさい」部外者の指図に反論の余裕もなく右に下ろすと召命を受けたあの時と同じ光景が蘇り、彼らの頭から爪先まで電流が走って、忌まわしい過去の失敗の記憶と、栄光に満ちた主の復活とが結合したのです。「復活の事実は彼らの日常の経験と結びつけられていた」(テニ) 打ち砕かれて、自分でどうしたらよいかわからずに、元の生活のただ中で主は臨在を顕され、それだけでなく未来のヴィジョンに至るまで「そうすれば捕れます(未来形)」御言葉に従うなら、おびたしい数の魂をすなどるのだと預言的に示します。その感動の爆発がヨハネの「主だ」告白と、ペテロの物凄い勢いの泳ぎでした。私たちは何かしら暗い部分を、罪の縄目なりいじめの記憶なり持っています。けれども主は選んだ者のために、何度も何処でも来て愛の炎を燃やされます。

6月11日

## 「網は破れなかった」

ヨハネ 21 : 9-14

武安 宏樹 牧師

### ① まず食事を（9節）

弟子たちは夜通し働いて疲れていたところ、奇蹟を見ることが出来ました。網を陸に引き上げると興奮も醒めて腹が減るところ、炭火グリルのいい匂い。彼らの釣果(ちようか)ゼロも主イエスは食物を備え、「働かざる者食う可(べ)からず」でなく、先ず働きでも行いでもなく「お説教」じみた話もせず、さあ食卓を囲もうよと。以上は一方向的な恵みですが、御言葉に従って与えられた魚も持参をと促され、併せて勤労の実も。ただ御馳走されるばかりでなく共同作業の実を喜びます。聖餐が誰でも均等に与れるように、主の愛は公平で人の業に先立つ恵みです。「だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、彼とともに食事を」(黙 3:20)

### ② 網は破れなかった（11節）

大漁もそうですが網が破れなかったのも奇蹟で、理由を考えさせられます。「破れる」原語は皮袋のたとえ(ルカ 6:36)、名詞形は「分裂」「仲間割れ」と訳され、破れない網は主の御体が一つであること、その実は決して失われず裂かれず、救いの完全性と、併せて教会に問題が内在し信者に罪や弱さを内包するとも、究極的には全能の神が立てられた教会は、破れも分裂もない完全な教会だと、これから聖霊の力で地の果てまで出て行く弟子たちに、教えたのではないか。パウロが争いの絶えぬコリント教会に、キリストにある一体性を説いたのは、「一つ」(Iコリ 12:13)に目を留めることから、一致への希望が始まるからです。

### ③ 御体(みからだ)は裂かれて（13節）

5000人給食(6:)の再現。「どこからパンを?」「あなたがたがあげなさい。」当時は何と無茶なと途方に暮れましたが、今やこれが答えかと全て悟ります。群衆は満腹して喜んで帰ってしまうも、弟子たちは準備&給仕の奉仕に与り、そして主の死と復活を経験した彼らは、「わたしが与えるパン」が「一粒の麦」死んで裂かれて実を結ぶいのちの原理を知ります。「網」は絶対破れませんが、その反対にキリスト者は砕かれ裂かれることで、いのち溢れ魂の救いを見る。報酬を主に感謝しつつ、次に続く救いの魂のために捧げたら素晴らしいことで、御言葉に従って仕えようと、破れない網と破れた自分で更なる献身に導きます。



6月18日

## 「働く父」

ヨハネ 5:17

武安 宏樹 牧師

「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」神が創造7日目に休んだので、人も休まなければならないはずの安息日に主イエスがいやしを行い、ユダヤ人に律法違反と訴えられた件です。神の子に休む義務は無いですが、神と認めぬユダヤ人には突っ込み所となり、平日は働いてよいが安息日は駄目と、文字に拘泥し人を支配しようとします。私たちはどう解釈すべきでしょうか。人だから働いてはいけないのでしょうか。うまく調整つかず日曜に仕事や部活を入れると、神と教会から罰を受ける等、そういう教育を受けると、罰や批判を受けないため努力する信者となります。「～されないように」消極的な信仰で終始することも、可能かも知れませんが、そんな信仰でよいのでしょうか？神が人に備えた働くこと休むことの価値は成文法&不文律で判断できるほど単純ではなく、むしろ神が私たちに人間にどれほど素晴らしいことをしてくださり、今この時に私を通して成さろうとし、消える金や評価でなく天に富を蓄えているか、神との関係で捉えることです。主イエスは強制労働とは些かも思わず、人のために労する喜びが土台でした。

こんな働いているのに正当な評価を受けていないと、世の「父」は不満です。父だけでなく母も子も、職場が家庭や学校に変わるだけで基本的に同じです。ある意味で仕方ないことで、強制される秩序の下で人は生きているからです。でもそれでは目に見える物のために生きても、究極的に心は満たされません。それは神が人に宗教心を備えるからで、霊性が豊かにされるために安息日も、教会の諸奉仕を行う楽しみも与えられています。世の仕事も教会の奉仕でも、うまくいかなかったり喜んで出来ない時には、神との関係に立ち返ることで、自分はユダヤ人の如き律法主義に陥っていないか、振り返っていただきたい。そして悔い改めと共に聖霊による新しい力をいただいて、今日も喜んで神と隣人に仕えようと決断してほしいのです。これが毎朝の静思の時の基本です。悪魔のやり方は律法主義で縛ることで、ユダヤ人のイチャモンは典型的です。そうならないために忙しい方は、神の大きな恵みの視点によって管理しつつ、小さなことに感謝する。この大&小の二つの目で働きの視座が変わります。仕事を与えられるのは神です。人の業にゆとりを確保すると聖霊が働きます。

6月25日

### 「わたしを愛しますか」

ヨハネ 21 : 15-17

武安 宏樹 牧師

「わたしを愛していますか。」主がペテロに問われた愛する意味を探ります。脚注「アガパオー」「フィレオー」前者は神の愛に使われる原語で(3:16/13:34)神と御子が罪人を愛された愛を以て、信仰者はその愛で愛し合うものですが、主が1 & 2度目に問う愛にこの語が用いられます。問われたペテロとしては、そのまま「私はあなたを愛して(アガパオー)います！」と返すなら模範解答で三度も問い直されなかったでしょうが、これまで叱られ上手で要領が悪く(?)どう評価されようが自分の思いに正直な彼が、模範解答など出来る訳がない。では追試を受ける彼は出来が悪いのか。弟子=凡人の代表とも見られますが、あくまで人間的な見方で、主が特別に選ばれたのだから優秀な弟子のはずで、個性的性格ゆえ軋轢(あつれき)も数あれど、リーダーシップが砕かれて練られるならば、大物になると主は見通していました。逃亡の失態を犯した記憶も新しい彼が、「アガパオー」などと返せば嘘になる。とても主が求める愛で私は愛せないと。ゆえに彼は兄弟愛&友情愛を表す、後者の「フィレオー」で三度とも答えつつ、自ら絆を断ち切った過去にケジメをつけるため、仁義を通す愛で応じました。

人それぞれ愛し方があり、模範解答の如くきれいに神を愛すのも悪くない。他方でやぶれかぶれ「私にはこんな愛し方しか出来ない!」開き直ったように、ありのまま身丈に合った神への愛し方や、仁義の通し方もあるのではないか。エリートでも不出来でもなく、己の限界を知るゆえに背伸びせず恵みの神に届かない部分を委ねていく理に適った信仰者です。神が自分をどう創造され、主にあって何が出来て出来ないかを悟って、肩の力の抜けた信仰者になれる。この時のペテロはそのような境地に達しつつ、確信をもってそう答えました。主が三度問われた目的の一つは、三度主を否んだ過去(18:)の精算でしたが、それだけでなく三度同じ答えを言わせることで、彼は不安になりながらも、意味を深く探らされたのです。主は三度の「フィレオー」をどう受け止めたか。親や先生や上司が模範解答以外に怪訝な顔をするのとは、全く違ったのです。むしろ珍回答を興味深く笑顔で、ユーモアとウイットに富む方は受けたので、「それではあなたは最善の兄弟愛を貫くのだね?」三度目は同語で問いました。ペテロは不本意ながら三度、愛を深く理解し繰り返しの恵みに浴したのです。

7月2日

## 「行きたくない所へ」

ヨハネ 21 : 18

武安 宏樹 牧師

本節ほど主が献身者の末路について、あからさまに語る箇所はありません。どうすれば「行きたくない所」に、喜んで連れて行かれるようになるでしょう。最初の召命「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう」から、もっと素晴らしい喜びに満ちた人の救いに関わる働きのため、スカウトします。主についていけないことには、弟子として苦しみも楽しみも人間的な成長も、わかりませんし、その過程で嫌なことも人間関係の葛藤も十字架への反発も、それで実際に離れ去った者も多くいましたが、それでも彼らはついて行った。私たちも同様に必ずしも望んだ生活にならずとも、なおも信仰をやめません。なぜついて行くのでしょうか。御利益があるとか友人と会えて楽しいとか、そういう恵みもありますが、もっと深い所でキリストの人格に魅力を感じて、御言葉が真実であることを体験して、今ここにいるのではないのでしょうか。信じた当初は自分の思い描く信者像を目指し、思うがまま生きようとしています。「自分で帯をして、自分の望むところを歩く」若い信仰も主は否定しません。そのように成功や失敗を重ねながら、愛のうちに祝され砕かれて成長します。

けれども「自分」を主語とし、要所要所で聴き従っていただくだけの歩みでは、ペテロの志す「愛」を貫徹でないと主は言われ、ありきたりの信徒とは違った、特別な召しに彼を招くからこそ、「あなたはわたしを愛していますか？」と、わざわざ三度も問われた。客観的な評価や一方的な指名で出来る働きでなく、十字架を背負う志を問われ(マタ 16:24-25)、それでも愛しますと答えました。これまでは自分の力で歩みながら主を求めてきたが、全く違う人生になる。御手の中に放り込まれ引き回され、最後は生命を取られてもついて来ますか。動機は「愛」以外の何物でもありません。神が御子を与えたほど罪人を愛して、その愛を受けて自分の思いを十字架につけて、主に従いたいと願う愛です。非常識で採算度外視で馬鹿馬鹿しい愛です。危険を賭して上京するパウロは、「御霊に縛られて～主イエスの名のためなら、死ぬことも覚悟」と言いました。行きたくない所に連れて行くのは悪しき勢力かも知れませんが、その背後で、聖霊が主の僕を縛って引っ張って栄光を現されます。二人とも殉教しました。不本意でしょうか？とんでもない。「愛」を貫徹した末の最高の人生でした。

7月9日

## 「いのちのみことば」

詩篇 119:9-16

佐藤 賢祐 師

### ① 119篇9-16節の前半と後半

この詩篇119篇を綴った詩人は、神の言葉を慕い求めました。前半には一人の信仰者が神を慕い求める思い、後半には神の言葉に生きていく決心の思い、恵み深い神への信仰の応答が記されています。

### ② 神の言葉の力

神の言葉は、人が歩むべき道を示し、時には罪人を悔い改めに導き、打ち砕かれた人の心に平安と慰めと希望を与えます。何千年も前から、人は慈しみ深い神の言葉によって歩みが育まれ、心の内側から清められ、父子聖霊なる神の祝福によって幸いな営みが導かれてきました。神さまは、神を求めるその人の全てを恵みで満ちたらせ、心の奥深い所にまで介入し、力強いその御手によって守り、時には前へ前へと進ませてくださるお方です。

### ③ HBCへ遣わされる前に与えられた御言葉

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」ピリピ2章13節

### ④ HBCの沿革と目的

### ⑤ 御言葉を土台として

神さまは、私たちの歩みの折々に御言葉をもって決断を与え、道を示し、その歩みを導かれるお方です。御言葉に従っていくなれば、その道はまっすぐにされ、どんな障害、弊害があったとしても神さまがその道を開かれます。逆に、決断と行動の土台に御言葉がなければ、その歩みはどこかで綻び、崩れ、立ち行かなくなってしまう。

### ⑥ 結語

御言葉は、イエスキリストによって永遠のいのちを与え、天の御国を約束しこの地にあつては、あふれるほどの恵みを約束しています。その一つ一つの神の言葉、永遠のいのちを与える、御言葉を心の内にしっかり蓄えて、救い主イエスキリストと共に今週も歩んでいきましょう

7月16日

### 「地の栄光を現す」

ヨハネ 21 : 15-19

武安 宏樹 牧師

「神の愛」で問われ「兄弟愛」で答える珍回答、「行きたくない所へ」導かれる、自分なりの信仰からキリストによる犠牲愛への成長へと、2回学びましたが、本日は主との愛の交わりから導かれる行いについて、同じ箇所から学びます。律法の二大要素として神を愛することと、隣人を愛することを完璧に行えば、神に受け入れられると主は言われ(マ 22:36-40)、ペテロは第一関門を通過し、それだけでなく主の愛を隣人に還元する「牧会」が、第二関門だと言われます。この務めは牧師一任ではなく、信徒同士が互いに励まし慰め合う事柄ですが、「飼い」食物を与えて牧場に導き、「牧す」羊のためにするあらゆる世話などを、彼は専属で全て献げるよう命じられています。魂に関わる務めが隣人愛です。特別に愛された者として命がけで神を愛し、そのうえで命がけで人を愛する。行きつく先は自分の栄光ではなく神の栄光を現すために、具体的には死です。「主は牧者たちの多くには手心を加え、血が流されないようにし、奉仕に専念していれば良いようにしているが、サタンはことごとくに戦いを挑んでくる。羊たちを養う者は全て、いつでも死ぬ覚悟でいることが必要である」(加6:ア)

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」と、主は言われます(10:11)。あなたがわたしを愛するなら同じ牧者の道を歩み、わたしと神の栄光を現そう。それで「わたしに従いなさい」と言われました。主を愛することが信頼関係に立つことなら、従うことは御心を行うことです。私たちの最も困難な行いは隣人を愛することで、一対一に留まらず複雑です。年数が経つと様々に用いられるのに比例して、人間関係がややこしくなる。牧者は知識&知恵&忍耐&決断力を、そして当然の如く祈りを必要とします。不本意でも隣人が生かされるために、自分が不利益を蒙って己を殺すことや、ようやく收拾がついたと思いきや、もっと厄介な人と関わざるを得なくなる。プライド&偏見&無知&恐れを克服しても、自分の愛の無さを痛感させられ、それでも主の命令だからと何とか愛そうと頑張れば、心身に不調を来します。牧会は必須の働きですが、主は「従いなさい」だけで方策は示しませんでした。ここで「愛」の原語を覚えます。地上から梯子を一歩一歩昇る「兄弟愛」でなく、天来の「神の愛」が隣人愛につまずいた私たちに、時宜に適う助けを与えます。

7月23日

## 「この人はどうですか」

ヨハネ 21 : 20-25

武安 宏樹 牧師

本書最終回。最終節に「その一つ一つを書き記すなら、世界もその書かれた書物を収めきれない」著者は膨大&遠大な神の恵みに、恐れをなしています。ペテロは主だけ愛し従うと告白した舌も乾かぬうち、「振り向いて」しまった。御使いに反し後方を振り返り、塩の柱と化したロトの妻の悪しき例を(創 19:)想起しつつ、重要でないことに囚われ主に集中しないことを、咎められます。信仰不足&言行不一致により、与えられた恵みを「塩漬け」にする罪を犯した。要するに献身を表明した者は、後だけでなく横も振り向くなと主は仰います。それは主だけ見上げるなら、同じ釜の飯を囲む友がどうでもよいのではない。「兄弟に対する関心と思いやりからか、他人に対する好奇心からか、ヨハネに対する嫉妬心からか、他人に関心を持つことがいけないではありませんが、他人や世の動きに、異常なまでの関心を持つのが問題なのです。」(尾山令仁)「ペテロの職務は羊を牧することと、最後にキリストのため死ぬことだった。ヨハネの職務は物語を証し、長寿を全うして平安のうちに死ぬことだった。私たちの栄光は、決して他の人々と比較されるものではない。」(W・パークー)

「主よ。この人はどうなのですか。」(22 節)必ずしも悪い詮索とは限らずとも「比較」のせいで主だけ従うべきベクトルが傾き、エネルギーが削がれている。もしかしたら彼の背後で「そんな独善的な信仰では尊敬されませんよ？」と、惑わす悪魔が見えたので主が叱ったのかも知れませんが、そう考えてみると、このやりとりは、彼らが託された教会形成に対し重要な教訓を与えています。同労教会の教勢ががどれほど伸びたか、尊敬を集めているか、家族や健康がうまくいっているか、自分が下であれば妬んで、上であれば優越感に浸って、結局は自分を中心とした形だけの宗教生活に墮し、福音から力が失われます。役員同士足を引っ張り合い、牧師同士競合すれば、教会の靈性はダウンする。逆に私たちが主の十字架だけを見つめ、悔い改めと赦しに立つ決心するなら、比較や詮索といった惑わしから解かれ、似姿に近づく聖化の恵みに浴します。原文で「どう」「何の関わり」は同語、22 節「あなたに」「あなたは」は連続します。だから創造と救いの恵みに立っていれば、それ以外は何の心配も無用であり、繊細で弱い「あなた」も、主が選ばれた以上信じ従えば全て満たされるのです。

7月30日

## 「地の果てまで」

使徒 1 : 3-8

長谷部 愛実 師

主イエス・キリストは昇天前、逃げるばかりだった使徒たちが「エルサレムを離れないで」「父の約束」を待てるよう、「数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きておられることを使徒たちに示」し、彼らを励まされた。死に打ち勝たれた主は、恐れのあるエルサレムの地を使徒たちが福音を語る最初の地と定めておられた。

聖霊のバプテスマを受ける前の使徒たちにとって、神の国はイスラエルのための国でしかなかったが、聖霊は彼らが考えもしなかった「地の果てまで」宣べ伝えるための助け主でもあられた。使徒の時代から教会は、主のみことばに従って、福音を宣べ伝えるべき「地の果て」を目指してきた。

ペテロにとっての科尔ネリウスの家(使徒 10 章)、ダマスコの弟子アナニアにとってのサウロのもと(使徒 9 章)が、ある種の「地の果て」であったように、堅く閉ざされた同胞ユダヤ人たちの心、恐れのある地、伝道の出発点エルサレムもまた、使徒たちにとっての「地の果て」であったかもしれない。

私たちにとっての「地の果て」とは、キリストを証しするのに最も遠く、自分の思いを超え、聖霊によってでなければ思いつくことも、たどり着くこともない場所であろう。私たちにたどり着くことができるのだろうか。

私たちの行く先を「地の果てまで」と定められたのが、栄光の天から罪の地、よみにまで降り、私たちの救いを成し遂げられた主であることに私たちの希望がある。神である方が、ここまで ご自分を卑しくされたのに、私たちに行くことができない場所、捨てられないものなどあろうか。主は今日、私たちをどこへ遣わしておられるか。

8月6日

## 「あなたの神は私の神」

ルツ記 1:15-18

武安 宏樹 牧師

本書の目的については、純愛物語や親切な行いの勧めなど諸説ありますが、美しいストーリーに人間的な背景など想像しつつ、ナオミ&ルツ&オルパの三寡婦(やもめ)が何を思い何を期待して言動に出たのか。三者三様の愛がありました。以上の情愛も良いですが、神が旧約～新約のキリストへの歴史的流れを通し、神の愛と御手が三女性の心の動きを通し、語られることを見ていきましょう。エリメレク&ナオミ夫妻は主を信じる家庭で、飢餓を避けるためモアブ移住、そこで息子たちは当地の嫁と結婚も、夫も子二人も死に寡婦三人が残ります。祭司エリ家の如く不肖の息子だったか、女手一つの育児が至らなかったのか、自分以外の家族全てが死んでしまった、悔いと罪責にナオミは苛まれていた。「全能者が私を大きな苦しみにあわせた」(20節)何と絶望的な叫びでしょう！私たちもあんな罪を犯したから苦しんでいると、因果応報に囚われがちです。妻として母として駄目人間だから、故郷で一人静かに死を待とうとしていた。罪意識は人を生ける屍にします。嫁二人は他人だし再出発させてあげたいと、愛と信頼がありました。応えたオルパは義母に迷惑かけないため帰郷します。

以上のナオミとオルパの言動を、人生の苦難に主への信仰を貫けない姑と、人情と自分の将来を計算して帰郷した嫁と、敗北者と片づけるのは簡単です。けれども本書最後が系図で総括され、新約最初の系図にも引用されるように、救い主への流れと、後の異邦人世界への福音伝播の視点から捉え直すならば、新しい視座を得ます。第一にナオミを一人にさせなかった神の御手を見ます。偶像礼拝の家から来た嫁たちには、主を信じて夫に仕え子を愛し嫁を愛する、信仰者としての証しが感化を与えていました。それゆえ去り難かったのです。姑も同感でしたが「主があなたたちに恵みを」(8節)と委ね送り出そうとした。第二にオルパは帰郷しましたが、主を信じる家で得た宗教生活と姑の記憶は、たとえ隠れ信者のようになっても消えなかった。モアブはロトの子孫(創19:)以降は靈的混淆と墮すも、当地で彼女は未信社会&家庭に遣わされたのです。第三に「あなたの神は私の神。あなたの死なれるところで私も死に…」との、告白を通し、ルツは主が自分の将来だけでなく世界を動かし歴史を造る神と、二人と違って理解していました。恐れと死の間を主の愛が人を通し変えます。



8月13日

## 「報いてくださる神」

ルツ記 2:8-13

武安 宏樹 牧師

二人の嫁のうちルツは姑の帰郷に同行し、信仰の一步を踏み出しましたが、頼る財産も人も無く「素手」(1:21)も、結果的に信仰が莫大な相続を生みます。ルツには未だ見ぬ地のはずが「戻った」とは、神の定めし魂の故郷を示すのか。ベツレヘムは後にダビデが都に定めるエルサレムの近郊です。本書は名前の通りルツの信仰に光が当たるのは当然ですが、ストーリーを導くのは神です。主なる神が各人を造られて、結び合わせて、人間関係をコーディネートする。ルツの信仰が異邦人への救いの扉を開けて、要所要所で姑の助言が述べられ、二人で共に歩む交わりの麗しさは、弱さを支え合い長所を認め合うコンビで、直観的&体験的なルツをナオミは律法知識で制御しつつ、挫折が癒されます。さらにベツレヘム到着が刈り入れの季節という、神の絶妙なタイミングから、食い扶持を得られ、信仰によって歩む者に有り余る仕事の祝福を覚えます。

2章で「有力者」(共同訳)ボアズ登場。前章で二寡婦の「素手」とは対照的で、無から有を造り出す神の信仰と信頼の交響曲(シンフォニー)です。ルツは自ら働こうと志し、異邦人ゆえ苛められる危険を顧みず、主が働き場所を与えてくださると信じ、必ず「親切」な人がいるとの確信に、律法的にも落ち穂拾いが寡婦や寄留者に、認められているゆえ、律法と信仰が出会えば素晴らしいことが起きるのでは。姑はおぼろな期待から嫁を送り出し、果してボアズとの邂逅がありました。就職を斡旋し、他に取られないよう正社員同然の条件を提示し、他の者には彼女を尊重するよう厳命し、「わざと穂を抜き落とし」律法で保証した権利を越えた破格の対応で迎え、通常ではあり得ない報酬に姑は驚きを隠せません。ルツの卓越した勤務態度は他の女たちと一線を画し、自分のためだけでなく、神と人に一途に仕える姿に聖霊の働きがあり、併せてボアズの心を打つのは、異邦人への憐れみにひれ伏す最大限の謙遜と尊敬です。ルツはボアズの上に、主を見上げ、ボアズはこの娘を何とかしたいと決心し、愛が生まれました。彼の愛は信仰によって近づく者を法外な報いで祝福される、契約関係による神の愛を示します。動詞「報いる」は名詞だと平安&平和&健康&繁栄を表す、シャロームですが、この動詞には敵に報復や、不完全を完成させる意があり、信者の報いは人間的祝福は過程に過ぎず、目的は神の胸に抱かれ還る愛です。

8月20日

## 「幸せになるために」

ルツ記 3 6-13

武安 宏樹 牧師

本章は「買い戻し作戦」。莫大な報酬を手にしたルツがボアズの畑だと明かすと、ナオミはこれぞ神の憐れみ深い導きと確信し、麦打ち作業の夜に、ルツに彼の寝床に潜入を命じます。当時の社会通念に照らしても疑問ながら、これまでの経緯で彼も「気」はあるはずと直感し、大胆に夜這いで迫らせます。「あなたが幸せになるために、身の落ち着き場を」姑ならでは「親心」からか、嫁の幸せを願う愛情と、財産目当てに貧困から脱出を図る打算がありました。「幸せ」の原語は「良い」意で、互いに心身健康のウェルビーイングを願います。ここに女の幸せを願う姑の現世的価値観が見えますが、主婦の本音でしょう。ルツは姑の配慮をよく受け止めて、「おっしゃることは、みないたします」と、恐るべき従順です。「イケオジ」はいいが娼婦の如きやり方は勘弁とかでなく、さりとして盲従でもなく、神にあって姑を信頼して「安らぎ」(1:9)を得ました。無茶な縁談が実を結ぶ過程で、三人に共通したのは同じ神を見上げながら、熟慮を重ねた言動と思いやりと仕え合う心で、ルツは神の御手に委ねながら、信仰の一步を踏み出し、彼に驚かれても取り乱さず粛々と務め(ミツシヨン)を行います。

「あなたの覆いを、あなたのはしための上に」(9節) 男性の服の覆いを女性に広げるのは妻とするしるし。遊女のような馴れ馴れしさでなく身を低くして、彼の応答を待ちます。「覆い」は「翼」(2:12)と同語で、その時の言葉の答えに、彼の御翼の陰に覆われつつ、本書のキーワードである「買い戻し」を求めます。贖い主ボアズは異邦人ルツの前に立ち、罪人への神の愛と選びを予表しつつ、この大胆な作戦と繊細な会話を通して、神への近づき方と救いの開かれ方が、予表されています。「覆い」「翼」が至聖所の垂れ幕とケルビムを連想させつつ、ルツの信仰という鍵を通して、天に広げた翼を下ろし私を救ってくださいと、雅歌書の如き男女の性の営みから、神と人の壁が破られる「奥義」なのです。「キリストはご自分の肉において隔ての壁である敵意を打ち壊し」(エペ 2:14)「肉体という垂れ幕を通して、この新しい生ける道を開いて」(ヘブ 10:19-22)ルツは大胆に至聖所に突入して、「御使い」ボアズはその思いを受け止めつつ行動を評価し結納を送ります。三人とも神中心の信頼関係と謙虚さをもって、「信仰と希望と愛」(1コリ 13:13)による献身から、人は真の幸せをつかみます。

8月27日

## 「家系の祝福」

ルツ記 4:13-22

武安 宏樹 牧師

本書最終回。本章ではボアズがルツに約束した通り、親類に伺いを立てて、当初は土地なら承諾も結婚とセットは断られて、晴れて買い戻しの権利を、ボアズが得て結婚を宣言します。帰郷時は絶望しかなかったナオミでしたが、赤子のオベデを抱く幸せな祖母となったところで、ストーリーは閉じられて、最後の段落はダビデに続く系図です。神の主権と買い戻しが本書の主題なら、系図が目的とまではいかずとも、無造作に名前が羅列されているのではなく、一言で言えばこの系譜が「きよくない」。ペレツはタマルが遊女の姿をとって、ユダとの間に出来た近親婚で、ラハブはカナン人の血が入った遊女でしたし、ラハブから生まれたボアズはモアブ人ルツを娶り、ダビデは姦淫罪を犯して、以上の系譜が「～によって」記述で、マタイ1章の系図にも明記されています。子を宿す希望の無い人、社会の隅に追われた人、救いに遠いと思われる人が、ペレツ' 割り込む' の名の通り、救い主に連なる系譜の光栄に与っています。私たちも同様です。罪を犯し続け、人に嫌われて、弱さを持った不適応者が、神の前に追いやられて救われることを、喜びつつ厳粛に受け止めるべきです。

1923年9月1日に関東大震災が発生して、間もなく100年の歳月が経ちます。1910年の日韓併合以来、多くの方が朝鮮半島から連行されて来られましたが、悲しいことに震災のデマの影響で、多くの方が虐殺の憂き目に遭いました。都知事は以前発信していた追悼文を出さないなど、風化が進められています。その後に太平洋戦争に舵をきった荒んだ時代を覚えつつ、今日の私たちにも、思想言論の抑圧と戦争協力の圧力がかけられる時代が、来ないとも限らない、不安な時代に置かれています。「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」(独がアイツェッカー元大統領)わが国も日基教団総督自ら伊勢神宮に必勝祈願し、天皇を主と仰いだ罪深き過去があり、戦後は占領下に置いたGHQの政策で、宣教師が大挙して送られて、一時的に基督教ブームで活況を呈しました。紆余曲折あれど神の御手の中で先達が仕えてきて、今日の教勢があります。私たちは目の前の現実に囚われがちですが、どのような信仰を告白するかが、次の、そのまた次の世代が開花するために問われています。本書の三名の如く、私たちも罪贖われた者として、互いに愛の犠牲を払おうではありませんか。

9月3日

## 「私たちの交わりとは」

Iヨハネ 1:1~4

武安 宏樹 牧師

本書は福音書と著者が同じため、書き出しをはじめ似た表現が登場します。執筆年代も同じく紀元 80 年あたり、流刑から戻リエペソで諸教会のお世話を、していた頃でしょう。他の 11 弟子が殉教する中で、ヨハネは生き残りました。殉教者はリバイバルの種子ですが、地上で主の足跡を語り継ぐ人も重要です。早くも初代教会は異端の嵐に翻弄され、信徒を惑わす偽預言者が横行します。間違った教えは戒めなければならず、悔い改め無くば除かなければならず、新約聖書の 21 の書簡は、教会と信徒に健全な神学の重要性を表しています。執筆目的も福音書は主の言動を証し、手紙はふさわしい信仰生活の確立と、両書は表裏の関係です。ヨハネは「イエスが愛された弟子」(ヨハ 21:20)として、主から体を触れ合い、心が震えることばを頂き、あふれる愛に与りました。この神の愛が教会と信徒にあるかどうか、霊性を測るバロメーターです。1 節で福音とは異端が惑わすように神秘的ではなく、聴覚視覚触覚に訴えて、「初めにある」霊的抽象的なものから、「さわる」肉体的具体的へと前進します。そして彼が求めるのは、3 節の主動詞「交わりを持つようになる」ことでした。

キリスト教は交わりの宗教と言われます。換言すれば信仰とは交わりです。御子との交わりとは、異端がプラス  $\alpha$  で神秘的知識&体験を求めるのと違い、生身の人間同士が主において、五感を通してリアルに交わることも含みます。「交わりを持つ」とは 24 時間交わることです。神と私のタテ、私と隣人のヨコ、その交点に主イエスが結び目となる十字架形です。愛と交わりの豊かさこそ、異端を見分けるポイント、惑わしの霊に抵抗する強固な教会形成の鍵です。皆さんは交わりしていますか。一方的に受けるだけでも与えるだけでもなく、会話も行いも一度に何往復もすべきで、遅れて返すならストレスを与えます。人間関係は難しいもので、SNS で既読スルーを避けるために当り障りない、早い返信が健全なコミュニケーションかという、かえって逆効果だったり、文字で残る履歴で詰め寄られても、そんな風に言った覚えないと萎縮します。主に間に入っていたきつつ、他にも創造的手段も編み出すべきでしょう。神との交わりが単調では人とも同様です。SNS に頼らずに手紙を書いたり、考えさせる善行をしたり、愛と交わりの教会を深く広く喜び合いましょう。

9月10日

## 「罪を犯さないようになるため①」

I ヨハネ 1:5~7

武安 宏樹 牧師

本書のテーマ「交わり」(3節)については、ぶどうの木(ヨハ15:)の有機的な、水分&養分&血潮の通い合う、神&人、人&人の関係を思い起こしましょう。本章では交わりが具体的に何か、異端とはどのように違うかが詳述されます。まず大事なことは、ぶどうの木がキリストの木であり、私たちはそのまま神の御前に立つことができない罪人で、交わりは契約が前提となっています。対して異端は罪の存在を否定し、血液の流れと人体の動きは別個だと主張し、生活は放縦です。自己充足でちぐはぐな信仰では、証しなどなるはずもなく、著者は光と闇に喩えながら、私たちの罪深い闇に光を当てることを勧めます。光を当てるなら闇は確実に無くなっていき、体の心も動きが良くなります。私たちはこの大なる神の光に、自分の闇を差し出すことが信仰の全てです。人には見せられない部分もあるでしょう。異端は神を霊的な次元にどめて、罪を認めることを恐れるあまり、究極的には神を神として信じていません。本書後半が「愛」の大合唱となるのは、彼らが深刻な愛不信心に陥った裏返しで、自分の罪深さを曝(さら)け出されて、ドン底から闇を照らすのが神との交わりです。

夜間の運転で対向車と光が交差すると、目が眩み周囲も見えなくなります。自分は罪人ではなく神の助けも要らないと、自分から光を放つほど皮肉にも、私たちは盲目となります。代表例が天からの光で目つぶしを喰ったパウロで、真理の目が開かれていると思いきや、その目を塞がれて3日間倒されました。主イエスの死⇄復活の日数です。光に照らされる時、自分中心の生活の偽りを痛感します。一時は死と暗闇の中でのたうち回る、十字架の追体験をします。そして闇を恐れる自分に死に、徐々に新しい生の力が沸くのが光の恵みです。パウロは宣言しました。「我キリストと偕(とも)に十字架につけられたり」(ガラ2:19) 光に闇を照らされたら私はどうなるのか。どうなってもいいじゃないですか。雨戸を開く時に湿気に満ちた部屋に、神の光と聖霊の風が闇を追い出します。「神と私たちとの交わりは決して空中楼阁や絵空事でなく、生活の中に照り輝かなければならない」(カゲアソ) 7節 「歩む」は生活、「きよめ」は継続的動作。主の教えは実生活で新たな課題を与えられながら歩み続ると、足らざる者も、肉の重荷の下に苦しんでいても、正しい道を歩むゆえに光の中に在るのです。

9月17日

## 「老年よ大志をいだけ」

箴言 20:29

武安 宏樹 牧師

「若い男の栄誉は彼らの力。老人の輝きはその白髪。」10～30代くらいまでは、いい学校⇒いい会社⇒いい伴侶&マイホーム。昭和期は景気も右肩上がり、雇用も安定し何事も金をかけられる時代でした。キリスト教界も同様ですが、令和の世は1/3が65歳以上の超高齢社会に、当教会は1/2が70歳以上の、超超高齢教会となりましたが、それ以上の高齢化教会もたくさんあります。体力も知力も衰えて家族や福祉の世話になり、概して死に近いのが高齢者で、でも私は何のために生きてきたのだろうか？ 夫のためか？ 子供のためか？ それはそれとして身の置き場のないまま、気がつけば歳ばかり取っていたと、空しく思われる方もいるでしょう。そこで人生を他の誰のためとかではなく、個人的なこととして取り戻し、死の彼方に意味を見出すのが宗教の役割です。極論すれば私たちは死ぬために生き、誰にでも死は避けようがありません。

キリスト者は死の彼方に明確な行先を見つめながら、いたずらに恐れたり、やることをやらねばと焦ったり、どうせ死ぬのだからと開き直るのではなく、50年60年と教会生活において信仰を培ってきた、年輪が活かされると期待し、持てる時間と労力と奉仕を捧げることです。人は死ねば灰で終わるのでなく、主の復活を信じる者は永遠のいのちを以て、天の御国で神の圧倒的な光の下、永遠に生きる者となり、その時に天で神が摂理の御手で地上に及ぼす事柄が、全てつながっていることを悟ります。地上で蒔かれた福音の種も善い行いも、世で評価されたかどうか拘らず、全ては神に覚えられて天に蓄積されます。個人の業がそうであれば、教会の業はそれ以上です。当教会の会員数は50余、在天&転籍&除籍を含めれば300名近くが、此処を経由して天に凱旋します。「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんあります。」(ヨハ 14:1-2)以上の御言葉から信者の特権は明らかです。私たちには死んでも「あの世」に住まいがあります。得るための代金も善行も連帯保証人も不要。けれども不思議なことですが、天に実家があると知れば煩悩から解放され、かえって地上の限られた時間で、神と人に喜ばれることをしようと思えます。教会は天の御国の直轄領です。先達が見守る天を意識して今を生きる暁に、老年は大志をいだくに至ります。

9月24日

## 「神は今も動いておられる」

使徒 8:26-40

ティム・ピカード師

### ① 神は導いておられる

本書冒頭で主イエスはエルサレムから、ユダヤ、サマリア、地の果てまで、外へ拡大しながら福音が宣教されると語り、本章は新たな一歩が見られます。御使いはピリポへ非常に具体的で妙な指示を与え、彼は躊躇なく従いました。そこへエチオピア人の宦官が主なる神を礼拝するために、上京して帰るため、馬車で移動していましたが、異邦人ゆえ神殿の中庭には近づけませんでした。この地理的&民族的&文化的障壁を越えるため、29節で明確に指示をします。驚くことに宦官は救い主に関する預言である、イザヤ書を読んでいましたが、ピリポに説明を求めました。ここに疑いの余地なく、神が導いておられます。今日も同じ神があなたの中で、周囲の人々の中で、働かれることを見守って、主イエスについて良い知らせを、口を開くよう私たちに指示しておられます。

### ② 神は明らかにしておられる

苦難のしもべの預言(イザ 53:5-6)から、神は宦官の質問にピリポを通して、その箇所が主イエスの福音についてであると、親切に答えられました(35節)。彼の苦難と死は他人のためであり、私たちの罪を背負い、傷を癒されました。今や主イエスを信頼する人は全て赦され、遠く離れていた者も歓迎されます。神は御言葉と民(←ピリポ)を通して、この良い知らせを人々に明らかにして、私たちを通して同様にされます。神が人々を導かれるので、質問に答えて、必要なことを伝える備えをしましょう。一緒に聖書を読み、イエスについて、どのように指摘されているか示しましょう。私たちが用いられますように。

### ③ 神は導き、明らかにし、神は救う

宦官は自分が救いの外にいること、自分から神に近づけないことを知って、けれども主イエスが彼の生命を背負って、身代わりに死なれた福音を聞いて、罪からの救い主として信じ受け入れました。あなたは自分自身を投げ出して、主イエスを信頼しましたか。他人からは敬虔で善良な信者のように見えても、彼は自分の汚れを知るがゆえにバプテスマを望み、神は彼を新生させました。続く39~40節には宦官は母国へ、ピリポは近郊へ福音を宣べ伝えていきます。全てにおいて神は働かれ、物語を記し、導き、明らかにし、救いを成します。

10月1日

「老年よ大志をいだけ」

箴言 20:29

武安 宏樹 牧師

「



10月1日

## 「罪を犯さないようになるため②」

Iヨハネ 1:8-9

武安 宏樹 牧師

9節は暗唱聖句としても有名です。当時の異端は、罪の性質が無くなった、罪は肉の問題でたましいとは無関係などと、罪の存在と有罪性を否定します。罪や汚れを表面的にとらえて、掃除のハタキの如き物で祓(はら)うのが神道ですが、これでは内面の罪責感&孤独感などの傷み苦しみに、何も解決になりません。与党の多くが日本会議や神道政治連盟などの議連に属し、戦前回帰を志向し、八百万の神を為政者が擬制することで、「罪無き」国家形成を通し戦争責任も、国民の自主性も有耶無耶に、自浄作用の効かない国家を作ろうとしています。人も同様ですが、アダムが堕落して以来、世界に罪という毒が回っています。8節の「罪」は無冠詞単数のため、個別ではなく人間の罪性をさしています。「欺いて」は惑わす&迷わす意です。神の前に罪を認めない国も人も壊れます。自分が可愛くて思うことを行うことを握っているなら、真理には出会えません。いわゆる「神・罪・救い」について、ここに居る信徒方は告白しておられますが、一つでもあやふやになると脱落します。逆に体験的にはよく分からなくても、聖書に記されているから信じると告白すれば、以上3つがリアルになります。

「なぜなら原因をそのままにして、結果が取り去られることを願うのは不合理だからである。むしろ神が我々に恵み深くあることに、まず関心を寄せなければならない。神はこの順序を守ることを自ら望み給う。神が我々を恵みのうちに受け入れ給うことへと我々の心を高め、次に神が我々に助けを与えて、和解の実りを味わわせ給うことへと進ませ給うのである。」(カルヴァン綱要)黄金律たる9節の解釈と適用がここにあります。「罪を告白」は複数形ゆえに、キリストの贖いによって、過去&現在&未来に犯すべき罪は取り去られるも、それでも日毎に罪を犯す弱さは告白しつつ、私たちは仲保者キリストを通し、「神は真実で正しい方」であることを見て、むしろ曝け出して成長するのです。「神がきよめてくださるのは今日明日のことでもない。私たちは肉に囲まれているかぎり、絶えず成長していかなければならない。しかし神はひとたび始めたことを、ついに成し遂げるまで追い求め、日々進行せしめる。」(同註解)人の力で罪を犯さないのは不可能で、自ら上がろうとする教えでは死にます。赦されて愛が深められ(ルカ7:47)、成長するのがキリストの救いの独自性です。

10月8日

### 「罪を犯さないようになるため③」

I ヨハネ 1:10-22

武安 宏樹 牧師

異端への攻撃の三番目は、彼らは罪を犯すことが神との交わりを破壊し、生来の罪の性質を認めながら、自分には無関係でいわば聖人だと欺くことで、律法と預言者を否定し、主の十字架を無駄と宣告するに等しいと断罪します。「『自分の罪を告白する』(9節)ということは、『罪が無い』(8節)とすることに対して、罪の实在を、罪があることを認めるというだけではありません。自分を『罪を犯したことがない』とすることを全く悔い改めて、自分がその罪を犯している罪人であること、その罪の全ての結果に、責任があることを認めることです。それを神の前に心から告白することです。」(田中剛二師)相変わらず罪と戦わなければならないのは、苦しんでいる人には酷ですが、「罪を犯さないようになるため」(1節)キリストが仲保者&弁護者となって、今も手を差し伸べておられると、「私の子どもたち」と呼びかけ強調します。「とりなし」=「助け主」(ヨハ14:16)。聖霊よりも主イエスの人間的な温もりを、私たちが罪の弱さを持ちながらも、人格的交わりを通して歩む素晴らしさを。神が主語の「宥(なだ)め」は、「罪の病毒を人間から消毒する」(パーカー)赦しの意です。

自分たちの罪をどのように受け止め、犯し続けないう対処するか学んで、病気や弱さのように、医学的&精神的配慮からアドバイスも出来そうですが、罪の場合は肉体と精神を司る霊の部分が壊れているので、簡単ではありません。対症療法で神との交わりも対人関係も困難な状況も、たしかに好転しますが、解決かと思いきや、また次のステップで別の罪の問題に悩まされるものです。終わりなき戦いが終生続き、人間的に打開を求める限り死ぬまで光は見えず、けれどもヨハネは2節文頭で、「この方こそ、宥めのささげ物」と宣言します。消極的には罪を犯すのは止めよう、積極的には罪赦された罪人だと力を抜いて、光の子としてありのままに愛の交わりの中に。罪の宥め自体が愛だからです。「なぜならキリストは、全ての人に罪責あるように教え給う時、罪人だけしか受け入れ給わないからである」(カウァン綱要)特効薬はキリストの贖いの事実、告白すれば確実にきよめる聖霊の働きで、罪と弱さに栄光が現されたらよい。自分が罪人と自覚していますか。悔い改めは神の愛と密接な関係にあります。罪を示されることは祝福の道筋。悔い改めて陶器師に器を明け渡しましょう。

10月15日

## 「神の命令を守る」

I ヨハネ 2:3-6

武安 宏樹 牧師

最初の人(アダム)は神の目を恐れるばかり「主の御顔を避けて、身を隠した」(創3:9) 苦し紛れの弁解をしますが、神から教えられていなかった裸への恥じらいと、命令を破った罪が露になります。悪魔は神の命令が人を縛ると惑わしました。自分はそんな悪いことはしていない、悪いのは妻と開き直るのも悪魔的です。されど信者には聖霊の内住ゆえ、悔い改めを拒むと主の悲しみが分かります。3節の条件節「命令を守っているなら」が、5節「ことばを守っているなら」に、変化しますが、ここにさばきを恐れる心の解放へのポイントが挙げられます。「命令」≡「律法」。律法は膨大ですが、一つでも破れば罪を犯したことになり、完全な遵守が求められます。3節は逆説的に誰も神の命令を守り通せないと、公然と神を知っていると宣う異端への強烈な皮肉です。神を知っていながら、実際は平然と罪深い生活を送るなら、そこには神との間に壁が出来ています。罪&律法&私たちの関係について、「律法を通して生じるのは罪の意識です。罪の報酬は死です。今それを行っているのは、私のうちに住んでいる罪なのです。」(ロマ3:20/6:23/7:11-13, 17)パウロは罪が人に与える害毒を説きます。

それでは神の律法を少しでも守ろうと努めることは、無駄なのでしょうか。そうではありません。「しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。」(ガラ3:22-26) 罪深く律法を守れなかった私たちは、キリスト信仰によって合格通知をいただくことができ、ただ罪を犯す弱さは残存するので、日々の悔い改めと赦しから光の中を歩む交わりが解毒剤です。「命令」⇒「ことば」律法で生じる闇から、キリストを仲立ちにことばを交わす、光の交わりへと対照させています。私たちは神から人から、さばかれることを恐れます。罪や弱さや心の傷を一方的に非難されたり一笑に付されることに、失望を抱きます。反論したところで追い討ちをかけられると闇に包まれます。そこで寛容に受け止め、愛あることばのコミュニケーションが存在するなら、人は再生への一步を踏み出します。アダムにも神はまず会話を試みています。神は私たちに上意下達ではなく、何往復も交互通行の交わりを喜ばれます。合間に御声を聞く豊かな交わりで、結果的に神の命令を守ることが出来ます。

10月22日

## 「ともに生きる幸せ」

詩篇 133:1-3

武安 宏樹 牧師

信仰者一致の麗しさが称えられます。人間的な仲よしこよしの推奨に非ず、主の御住まいにて共に主を見上げつつ、初めて兄弟が一つとなれるのだから、まず神&人のタテの関係、次に人&人のヨコの関係が優先順位となりますが、逆にヨコの祝福を求めると、傲慢や嫉妬を示されキリストに出会うことも、あるでしょう。神を愛するからといって、自動的に隣人を愛せる訳ではなく、年代も性格も違えば争わずとも、似た者同士ほどナーバスになりがちです。世は競争社会ですが、十二弟子の出世競争を主イエスが咎められたように、仲間内の不和や競争は喜ばれません。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです」(ヨハ 15:12)から、十戒の前半と後半がタテ&ヨコにクロス(=十字架)するのが、「第11戒」です。出世や保身を考えず父の栄光を現すこと、献げることで主は愛を示しました。この愛によらずに私たちは愛し合うことも、「兄弟たちが人になって、ともに生きること」も、「なんという幸せ!なんという楽しさ!」感動を覚えることもできません。時至って散らされ、また集められるのは主を見上げるためです。

実の兄弟ではカイン&アベル、エサウ&ヤコブ、ヨセフ&兄弟たちなど、同労者ではペテロ&パウロなど、愛し合っているとは即答し難い関係ですが、「だから信仰者は、兄弟がからだをもってそこにいるということについて、創造者・和解者・救済者である父・子・聖霊なる神をほめたたえる」(D・ボンハフター)教会の原意が呼び出された群れであるように、主が引き合わせた交わりなら、「とこしえのいのちの祝福」(3節)が隠されて、そこに私たちを造られた神と、罪人に仕える模範となられたキリストと、愛し合うことに躊躇を覚える者を鼓舞し結び合わせ教会を形成する聖霊が、三位一体となり手を携えるのです。同じ時代に同じ場所に居ることも主の御旨と、苦手な人にも賜物を見出して、主が距離を縮めてくださるよう祈るなら、そして信徒同士の関係だけでなく、教団教派を越えた同じ地域の教会、大国の利害関係に翻弄され銃を向け合う、戦乱の地における兵士たちでも、草の根から愛し合う交わりを造りましょう。ネット上の言葉や映像が不安と敵対を煽り、第三次大戦の軍靴の音がします。私たちは聖霊共同体なる教会から、御名による赦しの交わりに証しましょう。

10月29日

## 「イエスの真実に生きる」

ローマ 3:21-26

檀原 久由 師

10月31日は宗教改革記念日です。そこで、宗教改革者ルターの思いに重ね合わせながら聖書箇所を読みます。ルターが司祭・聖書学者となって、罪の赦しの問題に直面し、ひどく悩みました。旧約の神の義の姿は「神であり主であるお方の命令に聞き従うならば、祝福を得るが、聴き従わずに、主の道を外れる場合には、のろいとなる」（申命 11:26-27）という言葉に投影されます。祝福と罰を与える、正義の裁判官という厳しい神の姿です。

ルターは、復活の主イエスの「あなた方が誰かの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残る」という言葉に苦しみました。カトリック教会の罪の赦しとは、司祭が教会の告解室で、人の罪の告白に対する赦しとしての聖礼典（秘跡）です。もし、思い出せない罪や過ち、忘れてしまった罪があるならば、その人の罪は決し赦されずに永遠に残り、神の裁きの場に立つという恐怖が起こります。ルター自身もそれを感じました。

ルターはローマ人への手紙からその解決を得ました。3章 21-25 では、旧約聖書に啓示された神の義とは、イエス・キリストを信じる全ての人に与えられる神の義で、イエス・キリストの十字架の贖いによる、神の恵みとしての救いを意味します。新約では義と救いは同義語です。3章 26 は、今ではキリストの身代わりの十字架を信じる者に、救いが無条件で、誰にでも与えられると公表されました。裁きは、キリストが十字架で身代わりとなったことで無くなり、キリストにある赦しの中に、私たちは今生きているのです。感謝して、神に近づこうではありませんか。

11月5日

## 「古くて新しいみことば」

I ヨハネ 2:7-11

武安 宏樹 牧師

キリストにある悔い改めと罪の赦しから、主との交わりを体験しているか、信者の真贋を決す試金石となること、「イエスが歩まれたように」(6節)とは、どういうことか、結論から言えば'第11戒'「互いに愛し合うこと」(ヨハ15:12)、この愛があるかどうかは個人的にも教会的にも、やはり試金石となるのです。私たちの交わりはどうでしょう。近い間柄ほど過去の嫌な記憶や固定観念が、妨げとなっていないでしょうか。自分の思いがキリストの結び目より上なら、どんな善行を積もうが偽キリスト者と、ヨハネは自戒を込めて語っています。完全に愛し合うことは誰も出来ないのだから、悔い改めて光の中を通りつつ、愛を全うしようではないかと。「愛する者たち」と呼びかけるのはヨハネ自身、激しい性格が主に愛されることで変えられた経験から。「命令」とありますが、「とりなしてください方」(1節)＝「傍らに呼ばれた者」から、親友の勧めです。すでに旧約律法に明記され(レビ 19:18)、古くて新しい生きて働く御言葉です。「すでに」⇒「もう一度」。聞き飽きたなど宣うなかれ、古い命令に主の息吹で、愛になるのだと、彼は牧会者&教育者として使命感をもって熱く語るのです。

分かっているようで分かっていないのが、私たちの愛し合い方ではないか。「互いに愛し合う」命令の前に、「わたしがあなたがたを愛したように」が盲点になってはいないだろうか。全知全能で方策も無限で私たちの人間関係&霊性&御使いの配置も自在に動かせる御方の愛し方で、どうやって愛せるのかと、真剣に考えてもおらず、考えれば考えるほど何も出来ず嫌気が差してきます。でもそれが真に愛し合うスタートラインで、出来ないから祈り始めるのです。「その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めて～その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるか～人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」(Iペ 3:14-21)主が共に居られるなら苦手なAさんBさんC先生も、どうにかなりそうだと、勇気が湧きます。「開き直り」でなく、主を見上げることで魂の変革の実です。愛は歩み寄ることです。聖なる御子が罪人の傍らに寄り添われたからです。間を縮める努力を怠ると戦争になります。教会は同じ主を信じる群れです。へりくだるとは王座を神に明け渡すこと。再臨に至るまで光は動いています。

11月12日

## 「子どもたちよ」

Iヨハネ 2:12-14

武安 宏樹 牧師

老ヨハネから見れば、全世代「子どもたち」と呼んでも支障ありませんが、三世代に分けて教会の各世代が互いに結び合う、青写真があったのでしょうか。全ての人が幼子⇒若者⇒父世代へと、年齢も信仰も同じ道を歩んでいきます。歳月を経て若者に語れることがあり、子どもの目には親の信仰が影響を与え、兄上世代の活躍が憧れに。逆に子&若者の純粋さに大人は襟を正されます。同世代の切磋琢磨は成長を促しますが、若者だけでは霊性の限界があります。「タテ&ヨコ」世代間が有機的になると、信仰継承が磐石で健全な教会です。

「子どもたち」に語られる罪の赦しについては、前章から詳説されています。使徒信条にも登場するように、罪の赦しの福音は全世代の信仰のベースです。何十年経っても御霊に探らされて、示されたら悔い改める俊敏さが必要です。何度も新生体験をして愛と赦しで応える主に感謝し、御前に進み出ることで、10年後の信仰を形成します。若い人だけでなく、長老や大先生が涙を流して祈る姿に後進が衝撃を受けます。信じた時から今までこの確信に立つのです。

「父たち」親世代に飛ぶのは、信仰による親子関係を意識したのでしょうか。親亀こければ子亀みなこける。第一世代から第二世代以降へと進むにつれて、世俗化が進み信仰継承が難しくなり、そういうところに異端が忍び寄ります。主を「知って」いながら証しにならない父世代に、ヨハネは責任感に訴えます。「主の教育と訓戒によって育てなさい」(I<sup>h</sup> 6:4) 知識知恵の切り売りでなく、主との交わりから、芯のしっかりした自由な信仰を養われたか問われます。

「若者たち」上下に挟まれつつ、今後の教会とキリスト教界を動かす世代で、罪&世&悪魔との戦いがあります。振り解くのは難しくても打ち勝ってきた。それは主が勝利されたからで、キリスト者の勝利は救いを過去のこととせず、現在に適用し勝利し続けることです。ヨハネが励ますのは彼らが意気消沈し、新奇な教えに走りやすいからで、若者世代への期待が大きいことを思います。「弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり」(A<sup>7</sup> 11:34) 全員が若者たちです。御言葉は唯一の攻撃具(I<sup>h</sup> 6:.)。世代が縦横に愛し合う群れとなりましょう。

11月19日

## 「世も世にあるものも」

Iヨハネ 2:15-17

武安 宏樹 牧師

世の最前線で罪&世&悪魔と戦う若者たちを、著者は念頭に置いています。「世」とは、「神から離れてそれ自体で存在している、それ自体が目的であり、それ自体が救いであるとして見られる世界で神に敵対する一切のもので、今日の神を否定して自分と自分の欲望を貫こうとする、欲望の満足と追求に囚われている人間社会」(田中剛二)で、神の国に対抗する勢力や秩序として、パウロ曰く悪魔が世全体を傘下の悪霊どもと組織的に束ねています(Ⅰ<sup>o</sup> 2:)。キリスト者は「世」から救い出されて、創造主なる神&救い主なるキリスト&臨在の御霊による三位一体に囲まれながら、生きる世界が根本から遷されて、信仰者の共同体なる教会は、世界中に点々と散らばっている天の植民地です。著者が厳命するのが「世」との訣別ですが、世捨て人になれと言うのではない。世と「関わるな」ではなく「愛するな」と。私たちの献げる愛は二者択一です。偶像&不品行&貪欲など典型的なものだけでなく、仕事や家族や趣味などの、さらに信仰生活の範疇でも、御心より上位なら神を愛していないことになる。16節の三大欲望は失樂園の光景(創3:)。誰が全く関わらずいられましょうか。

どんな強靱な信仰をもった者でも、世の誘惑に悩まされない者はいません。あのダビデさえつまずいた、悪魔が隙を窺う世の力を甘く見てはなりません。罪を犯しても、神の前では悔い改めて赦しを得て立ち上がるチャンスがあり、赦しをいただいたということは解決を得たので、悪魔は手出しできません。されどダビデがそうであったように、社会的には刈り取りと償いを要します。信用を失ったり経済的損害もあり、程度や立場によって甚大な影響が出ます。私たちは周囲から後ろ指差されたり、社会で排除されることを避けようとし、家族や会社や地域社会に害が極力及ばぬようにし、世論に忖度して恐れます。世の中が助けてくれる訳もないのに、世を恐れて、すがるって、吞まれていく。けれども「世と、世の欲は過ぎ去ります」悪魔が世を意のまま操ろうとしても、世論操作や信頼喪失や経済的困窮で苦しむとも、終止符を打つ方が来られる。死からいのちへ変える神の国が、2000年前の初臨以降拡がりを見せています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」(ヨハ3:16)これは矛盾でなく、永遠への視座から世俗への愛を脱し聖い愛が支配します。



11月26日

## 「クリスチャンのためのパウロの祈り」

ペリピ 1:9-11

中村 孝 師

今日の箇所はペリピ教会のためのパウロの祈りが書かれています。

### ① 豊かな愛

信仰において神を愛し、人を愛するのはとても重要なことです。パウロはこの重要な愛について祈っています。あなたがたの愛は豊かになるということです。愛が豊かになることは愛に満ち溢れるようになることです。

1) 知識と識別力：愛は知識と識別力によって豊かになるとパウロは言っています。愛には限界がありません。知識は信仰における本当の知識、神について、罪の赦しについて、聖霊について、神から教えられる知識。識別力は判断力と訳されています。信仰において真の知識に基づく識別力が必要となります。そして正しい知識と識別力に基づいて愛は豊かになっていきます。

2) 大切なことを見分ける力：見分けるとは、良いものは何かを判断時に用いることばです。知識と識別力によって愛が豊かになっていくと良いことを見分ける力を与えられます。パウロはペリピ教会の人たちが豊かな愛をもって良いことを見分ける力をさらに得ることが出来る様に祈りました。

### ② キリストの日に備える信仰生活

キリストの日はキリストの再臨の日を意味しています。聖書の中でキリストの再臨に書かれている箇所は数多くあります。イエス様は必ず再臨されます。贖いの業の目的を成就されるためです。パウロはペリピ教会の人たちが毎日生きていく中でキリストの再臨のことを考えて下さいと言っています。

1) 純真で非難されない人：純真とは混じりけのない、汚点のない、純粋なことを言っています。ペリピ書の中で間違った教えに惑わされないようにパウロは書いています。パウロはペリピ教会の人たちが純粋な信仰を維持するように願っています。さらに非難されることがないとは人から非難されない、つまずきを与えないということです。

2) 義の実に満たされる人：イエスキリストによって義とされたクリスチャンには義の実が与えられています。パウロはさらにその義の実が与えられていくことを祈りました。F. デビッドソン師は義の実に満たされるとは少しずつキリストに似た者にして下さると言っています。

3) 神の栄光と誉れ：パウロの祈りの焦点はペリピ教会のクリスチャンが知識と識別力をもった豊かな愛をもって、純粋で非難されることのないクリスチャン生活を送ることでした。そしてクリスチャンを通して神様のすばらしさが現れることでした。このパウロの祈りはペリピ教会の人々の幸福を願う愛の祈りでした。そしてその祈りは私たちクリスチャンの祈りでもあります。

12月3日

## 「死者の復活」

I コリント 15:12-19

武安 宏樹 牧師

最近まで礼拝を守りお元気だった姉妹の召天に、「主よ！何故ですか！」と呻かざるを得ません。教会員も神の家族ですから同様にショックを受けます。私たちは喜怒哀楽を与えられ、喜び楽しみだけでなく悲しみ怒りもあります。それを特定の人や組織や自分にだけでなく、ヨブのように神にぶちまけたり、御霊に促されて、その感情を受け止め寄り添うグリーフケアも求められます。もちろん私たちはプロではなく、専門職に委ねる部分と一線引くべきですが、全能の神を、永遠の慰めを知る者として、悲しむ方々の隣人になれるのです。「幸福(さいわい)なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」(マ5:4)「喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ」(マ12:15)確信をもって感情を共有し慰めができます。信者未信者問わず否定できないことは、人は必ずいつか死ぬということです。天寿を全う以外に不慮の死もあり、胎内から誕生と異なり死に様は多様です。聖書は死は滅亡に非ず、身体と靈魂の分離による肉体的生命の断絶とします。死はさばきで異常であり「敵」(26節)です。第一の死が肉体、第二の死が霊的。されどキリストの死に結ばれた者は、肉体の死は永遠のいのちへの入口です。

コリント教会内で死者の復活を否定し、キリストの復活も無いという声に、パウロはそれなら自分たちは偽証罪で宣教も信仰も無意味だと、反論します。逆に言えば私たちは復活を信じるので、死を恐れたり避けたりすることなく、打ちひしがれて「神も仏も無い！」と嘆く人々に、希望を語るすることができます。とりわけ不慮の死に際しては、誰かのせいにして堂々巡りを繰り返しますが、死に様は多様ながら死は共通で、私たちの範疇から創造主の御手に委ねます。それ以前に日頃から愛する人々の存在を、神の所有と認める訓練が大事です。14節を逆に読めば、復活で初めて私たちの宣教も信仰も豊かにされるのです。キリスト者は日々死に備える訓練を通して、神を見上げる練習をしています。主イエスは同じ肉体を着て世に来られた。それは私たちと共に生きるため、同様に主は私たちの初穂としてよみがえられた。永遠に主と生きるためです。獄にて「我にとりて、生きるはキリストなり。死ぬるもまた益なり。」(ピリ1:21)パウロは地上に生きることさえ、隣人の益を図る上での損得勘定で考えます。信者に励まし、未信者に伝道。私たちは復活を力強く信じていきましょう。

12月10日

### 「食べて飲んで楽しむ」

伝道者の書 5:18-20

武安 宏樹 牧師

葬儀が2週続きましたが、前夜式では親族と故人の思い出を語り合いつつ、涙あり笑いありの時間をもち、とりわけ食べること的话题に花が咲きました。天の御国が祝宴であることは勿論、聖書で飲食に重要な意味を覚えました。創造主の最初の命令は「生めよ。増えよ。地に満ちよ…」(創1:28)でしたが、直後で「…それは食物となる」(創1:29)食事についてイの一番に定義します。墮落(創3:)は御言葉の違反と共に、「食べてはならない」食事の違反でもあり、人は神に与えられた心身を健康に保つ責務から、勝手に暴飲暴食することは、十戒の貪欲(出20:17)だけでなく殺人(出20:13)に問われ、神の御手に在って、私たちは自己管理や医師の助言を通して、自主的な判断を日々迫られます。とはいえ仕事や人間関係などストレスや、酒&煙草&麻薬など依存症状など、生い立ちや遺伝もあつたりするので、表面的な食生活で断罪するのではなく、心の深い部分を見ることです。親の手作りで温かいバランスの採れた栄養で、人の心は養われることから食事は神の愛の業。主の祈り「日用の糧を」と祈り、自分だけでなく家族や隣人と共に喜んで、神に感謝するのが食事の恵みです。

この食事について主イエスは真の意味を教えます。「我らの日用の糧を」は、貧しさや制御不能な心でも与え給えとの謙虚な祈りですが、それだけでなく、四福音書共通の奇跡記事である5000人給食の如く、無限の拡がりを含みます。肉体労働で空腹の少しでも多く食べたい男たちが満たされないと、争奪戦に。「ここには5つのパンと2匹の魚しか…」(マ14:17)弟子の偽らざる心境で、「それが何になるでしょう」(ヨハ6:9)不信仰ですがいたって常識的な返答です。されど主イエスは世の常識ではなく、天の非常識を教える奇想天外な教師で、僅かな食料を突き返すのではなく、そのまま手に取って天に感謝し配給すると、何ということか！裂いても裂いても尽きず、男5000人が満腹しなお余ります。御言葉によって「我ら」が1⇒5000+α家族用に繋がり、主の肢体となります。聖餐式にて私たちはパンとぶどう酒を通して、主の御体にあずかっています。「この方が天に居られ、私たちは地に居るにもかかわらず…一つの御霊によって永遠に生かされまた支配されるためなのです」(ハイルバ 助信仰問答 76)地上でも天の宴に同席できる、恵みの食卓を与えられる主に感謝しましょう。

12月17日

## 「義の太陽が昇る」

マラキ 4:1-6

武安 宏樹 牧師

旧約最終章、位置&時代的に新約直前で主の日と救い主について語ります。捕囚帰還後 100 年経過し神殿再建も、救い主は未だ来ずに民は無気力に陥り、神の愛&義&支配と敬虔な生活への懐疑で、信仰&社会生活は自堕落となり、自分たちの願い求めが叶わない失望で、自己中心的信仰に終始していました。「わたしに帰れ」(3:7) 帰り道も判らぬほど、即物的で鈍くなった民の靈性に、献金で祝福を試せとまで(3:10)、二度と帰れなくなる主の日までに(1節)、彼らが立ち返るための具体的方法まで教える、主なる神の特別な愛を見ます。逆に苦難の中で主を待望する民には救いの、「義の太陽が昇る」(2節)日です。太陽は創造主の作品でありながら、古今東西の天体礼拝の頂に神格化されて、日本でも仏教の大日如来、神道の天照大神が太陽神として祀られてきました。聖書で厳しく非難される豊穡の神バアルも同様で、「主」「夫」「所有者」意から、エリヤとの対決に見られる如く(1列 18:)、本章は義の太陽なるキリストと、偽りの太陽神に依り頼む悪者の滅亡が対比されます。偶像礼拝がNGなのは、「ねたみの神」は民と契約に基づく一体関係で、他の神々を許さないからです。

何が不満なのか？雨が降らない、仕事がうまくいかない、家族に不幸がと、とかく人は自分の都合やタイミングで主が答えなければ、別の神に乗り換え、御言葉を忍耐強く祈り黙想よりも、手っ取り早く他に助けを求めようとする。それは本当の神の力と愛を知らないからです。主は全ての病を癒やすことも、天候の制御、人心の支配、死者を生き返らせ、世界の終焉も出来る方ですが、そうされないのは主の時と、民のレスポンスを見て待っておられるからです。古事記によれば、高天原から男神と女神が混ぜた滴から日本列島が生まれて、天皇家の祖先たる天照大神が誕生との神話から、「日出づる国」国旗などから、愛国心と忠誠の背後に偶像礼拝が存在します。されど旭日旗の光線が四隅で、途切れているように、太陽光は闇の中から自力で出てこないと当たりません。バアル預言者 450 人の愚行を尻目に、エリヤは信仰を凝縮した一言の祈りで、偽りの神は何の反応も出来ないこと、主は祈りを聞かれる真の神と証します。「その翼に癒やしがある」光線は人の心の奥まで届いて、靈的死者を蘇生させ、「みことばはあなたがたのたましいを救う」(ヤコ 1:21) 世の光こそ私たちです。

12月24日

## 「神をほめたたえた」

ルカ 1:57-66

武安 宏樹 牧師

バプテスマのヨハネに関しては、不妊の母エリサベツからの誕生と生き様、そして最期は惨殺との死に様に、救い主の通られる道筋を整えることに努め、エリヤ再来と目されても否み、1<sup>ミ</sup>も御名を汚すまいと凄まじい謙遜でした。聖さと厳しさで栄光を帰すヨハネの誕生経緯に、父ザカリヤを通し学びます。「神の前に正しい人で、落度なく」(6節)祭司以前に人としての務めは完璧に、聖所に仕える仕事に限らず、家庭も夫婦生活までやるべきことはやっていた。そろそろ子がと期待し10年20年、不妊治療も無い時代に原因が判るはずなく、「しかし、彼らには子がいなかった」(7節)接続語は逆接も原語は順接に近い。いずれにしても子を宿すのが祝福との観点からは、敬虔な夫妻が何故不妊か、呪われているとは言わずとも、夫婦共に潜在的な罪意識や子が出来ない分を、残りの人生で人一倍献身と、いささか歪んだ敬虔さもあつたかも知れません。律法主義者のように病的ではなくても、「落度なく」をポリシーに生きるのは、どこか神を喜べず暗かったと推測します。男はとかく神学的に考え込みます。思考や敬虔さで受け止め切れない限界が、混乱と反論に現れます(12,18節)。

私たちは神の祝福とさばきについて、因果応報的に結論付ける悪癖があり、ザカリヤ夫妻も人知れず、何か罪を犯していたのだろうと内心で思っていた。結論から言えば告知(17節)直後に、「聖霊に満たされて預言」(67節)と成れば、良かったのにと考えがちですが、そうならなかったところに本質があります。完璧な信仰者が完璧な方向性で向かって、全能の神の量り知れない恵みを、小さな人間が信仰によって即座に受け止めるのは、不可能であると知ります。夫妻が罪を犯したからではないが、アダム伝来の罪の性質ゆえということで、彼の反応は人の代表です。「当番」「慣習」「くじ」に事務的な様子が伝わります。ここに私たちの落度無くば良しと化した、奉仕に対する戒めを感じ取ります。「正しい人で、落度なく」は賞賛の一方で、そのような靈性に対する皮肉です。彼が恐れたのは過去&現在の自分と家族と民の罪でしたが、人間的な行いや、神学的筋道以外に、未来の恵みと祝福を受けるといった視点が抜けていました。それゆえ謹慎10ヶ月、御性質と御業の黙想に専念させられる恵みで練られて、「神をほめたたえた」旧約三代契約から世界を透徹する、賛歌に結ばれました。

12月31日

## 「立ち返って、生きよ」

エゼキエル 18:32

武安 宏樹 牧師

本年は6年ぶりに最初と最後の日を、聖日としてささげられて感謝しつつ、標語聖句のおさらいをしつつ、振り返りをします。「立ち返って/悔い改めて」原語シューブは本章18~32節に9回も登場し、聖書全体でも重要な概念です。内訳は「立ち返って」6回、「離れ」2回、「身を翻せ」1回。14章6節は一節で、同語が「立ち返れ」「身を翻せ」「遠ざけよ」と訳出しますが、これを後から順に、一つ目に罪&悪習慣から遠ざかること、二つ目に自分の努力から向きを変え、三つ目に一線引いて神のため生きる。私たちは間違いや行き過ぎがあったら、向きを変えるに敏速だったか。自分に固執し御心に背を向けていなかったか。心身が疲れることもありますし、元気なのにやる気が出ないこともあります。そういう時には主との交わりですが、聖書を読んで祈ることを賛美も含めて、音読して頭に叩き込んだり、生活の中で断続祈禱、新聞から世界へとりなし、年の瀬には手帳を振り返り1年の感謝など、多方面から多角的に味わいます。恵みはあらゆる方向から来るので、フライもゴロも正面もキャッチするため、逆に大して打てずとも気が付けば勝つよう、数字に囚われず攻めることです。

「生きよ」旧約には救いの明確な概念が無い代わりに、霊的な生死の概念が用いられています。本書で最も有名な37章は枯れ骨に神の息が吹きつけられ、音がして骨がつながり筋と肉と皮膚がついて、息が入り大集団となる幻です。旧約的にはイスラエル復興、新約的には悔い改めによりキリストへ接ぎ木と、聖霊の賜物を活かした教会人へ。神が私たちが創造されたのは、単独でなく、隣人とつながり恵みが浸透しながら、自身も共同体も共に成長するためです。パウロがIコリント12章から共に苦しみ共に喜ぶ、主の肢体として教会論を、ダイナミズムから信者に体験させるべく、小生も与りつつ15年が経過します。主は十字架上で完全に死なれた3日後に、全能の父の御手で復活しましたが、永遠のいのちを感じる事が出来るのが、信仰生活であって主の共同体です。捕囚で亡国&離散の民となる屈辱無しには、新しいイスラエルは存在せず、「わたしたちの死は、自分の罪に対する償いなのではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命への入口」(ハイデルベルグ信仰問答42)死は生と隣り合わせです。神は死せる罪以上に、私たちの視野を永遠の生に目を開かせてくださいます。